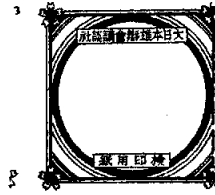


有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代

東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞

東京市本所區飯橋一丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)
電話(34) 代表 五六三〇〇番
牛込(34) 六二〇〇番
五六三〇〇番

(本製地海天)

梅忠
兵衛
川

冥

途

の

飛

脚

解題

寶永八年三月五日から、初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松門左衛門(時に五十九歳)である。

本曲は巢林子傑作の一であつて、三巻に分れてゐる。

實説

本曲の實説は詳でない。「御入部伽羅女」(寶永七)卷三に、「この廣い大坂にも珍しく、今年の春より梅川といふ新町の女郎、牢入してより久しい事ちやが、不思議なるかな手足爪先あの美しさ、髪かみの結むすひ振り、いつにても爪つめを隠かくすは猫ねこの變化へんかに疑うたがひなし、こなた衆も國くにへ土産みやげに、女郎の道中といふもの見ておきやれと、爰こゝにても見立みだてられし處へ、榎屋えのやの梅川うめがわそれや來たはとて人の山、高きが故ゆゑに貴きからず、器量きりやうをもつて貴人、數萬の中を八の字もどきゆりだし道中、黒雲あざむく鬘まつ投な島田しまだ」と見え、同卷五に、「榎屋えのやの梅川うめがわ曇くもりなき其身みの仕合しあ、佛神ぶつじんの御加護ごかごにて世間よこ廣ひろき御恵ごめぐみに、あひに相生あひまの松まつより勝まされし流行はやり女郎ぢやうらう、都みやこへ歸かへる名殘なごりとて彼方あなた此方こなたへ暇ひま乞こひ……色里いろさと廣ひろしと申まをせど、三箇さんかの津つにて是程このほどの心中こころ女未いだためしにも聞きえず」とある。

又「好色入子枕」(正徳二)によれば、忠兵衛は大和の百姓増田忠左衛門の長男に生れ、青年の頃、隣家の因州浪人の娘お吉と私通してゐた。然るにお吉の父は娘を他に縁附えんづけようとし、お吉は之を嫌きらつて破談はだんにさせようとしたので、父は娘を意見いけんし誤あやつて死に至らせた。之が爲に忠兵衛の父は世間體よこを憚はばり、表向おもては勸當かんだうとして、大阪淡路町龜屋かめやへ養子やしなに遣つかはした。當時たうじ風揚かぜあげが流行し、或日忠兵衛も風かぜを揚あげてゐた所、絲いとが切れて風かぜは新町遊廊榎屋にいうちゆうらうえのやの屋根やねに落ちた。それを拾ひろひに行つて梅川うめがわに逢あつたのが縁ゆかりの初めで、それから互たがひに深こくなり、遂つひに委託むかひたくの爲替金かへせきんを私ひそして梅川うめがわを請うりだし、大和路おほさして落ち行く。その途中で追手おの爲ために捕縛とらされ、寶永七年十二月五日千日刑場の露つゆと消えた。梅川うめがわは尼あまとなつて伏見邊ふしに庵いひを結び、忠兵衛の菩提ぼだいを弔なぐさつた由見えてゐる。

以上いづれが眞まことか知れぬけれども、「御入部伽羅女」の方が古ふるいだけ多分おほ分に眞まことを傳つたへたものであらう。但し忠兵衛が死罪しつざいに行は

れたのは寶永七年十二月五日ではなくて、それよりも以前である事は明かである。

影 響

本曲は初上演された時、既に好評を博し、大入であつたといふ。其の後本曲を改作した物に、「傾城三度笠」(紀海音作。正徳三年十月から曾根崎新地芝居)豊、「けいせい戀飛脚」(菅專助・若竹笛躬作。安永二年十二月か)、「曾根崎新地芝居(座本豊竹此吉)に上演」「戀飛脚大和往來」(歌舞伎狂言から轉じたもの。天保元年澤福造)がある。また一中・豊後・常磐津・清元などの他流にも改作されてゐる。

歌舞伎では本曲以前に、梅川・忠兵衛を脚色した「けいせい九品浄土」(寶永八年正月から京都都萬太夫座に上演。梅川を山本歌門が遊廓を脱出しようとし、甘言を以て三度飛脚の忠兵衛を欺く。愚鈍な忠兵衛は之を信じ、梅川と共に)がある。其の後本曲の影響を受けて作らに駆落ちして途中で馬方に殺される。梅川は其の後越前三國の遊女となつたといふ仕組みである。其の後本曲の影響を受けて作られたものに「戀飛脚大和往來」(寶曆七年七月より大阪大西の)がある。上述の「けいせい戀飛脚」は全くこれに據つたものである。

この作は現今も繰返し上演されてゐるから、其の概略を記す。これは上巻(生玉の段・飛脚屋の段)、下巻(西横堀の段・新町の段・新口村の段)から成る。飛脚屋龜屋にお諏訪といふ忠兵衛と許嫁の女がある。分家の従兄利平はお諏訪に横戀慕し、忠兵衛が遊女梅川に馴染んでゐるに於て、梅川に執心な中之島の八右衛門と談合し、忠兵衛を放逐して龜屋の婿とならうと工む。然し忠兵衛は梅川の兄忠兵衛の爲に救はれる。(以上上巻)。下巻西横堀の段は所謂羽織落しの場合、新町の段は封印切りの場である。新口村の段では、親孫右衛門に目隠しをさせて忠兵衛と對面する。

これ等近松の原作を改めた物は、目先を變へようとして色々の物を取入れ辻褄を合はせた爲、舞臺面の技巧變化には富むが、却つてくたくしくなつた。又大衆に分り易くするやうに説明を加へて、原作の名文句を抹殺してしまつた。それは實に巢林子の立派な藝術に對して、泥を塗られたやうな心地がするのである。

上之卷（龜屋の）

登場人物の主な者

忠兵衛	衛	淡路町飛脚業龜屋の養子、二十四歳	妙	閑	忠兵衛の養母	甚	内	堂島藏屋敷の侍
丹波屋八右衛門		中之島米穀商	伊	衛	忠兵衛の手代	ま	ん	龜屋の飯英女
		(忠兵衛の友人)	兵					

梗概

忠兵衛は大和國新口村勝木孫右衛門の子に生れ、二十一歳の時大阪淡路町飛脚商龜屋妙閑の養子となつた。彼は家業を勵む傍ら書道・茶道・俳諧・碁・雙六を習得し、美貌であつて酒も少々は飲めた。其の彼が新町に遊んで、美しい遊女の梅川と戀に落ち、家業を袖にするやうになつたのは自然な成行きである。忠兵衛の手代等が、委託された貨物や爲替金の業務を扱ひ、又得意先を廻つて委託書狀を寄せ集めて歸る、さうした忙がしい時でも、いつも彼は不在がちであつた。

霜月二十五日、堂島の藏屋敷から其内といふ侍が使者になつて來り、「江戸爲替三百兩の先狀は既に届いたのに、金をなぜ届けぬか」と、厳しく督促する。手代伊兵衛は「まだ參つてゐませぬ」とて、之を宥めて歸す。その後、中之島丹波屋八右衛門の使が來て、「江戸小舟町の米問屋から送つた爲替金五十兩が、まだ届かぬとは不埒ぢや」と、詰つて歸る。妙閑は奥にゐて之を聞き、「丹波屋へ渡す爲替金は十日も前に届いたのに、なぜ忠兵衛は渡さぬのか。近頃彼が素振はそはくして眞面目でないやうぢや。意見しようかとも考へたが、いつそ黙つて見てゐる方が、却つて彼が恥入らうと思つて控へてゐる」とて、憂はしげに語る。

其の黄昏頃忠兵衛は、遊びに耽つて思はず時を過ぎ、驚いて急ぎ歸り、店前に立つて母の機嫌を案じ、様子を窺ふ。折から飯英女のまんが使に出て來たのを呼止め、しなだれかかつて内曲の様子を聞かうとしたが、まんは取合はないで行つてしまつた。

八右衛門は忠兵衛を尋ね来て、門前で逢ひ、「これ忠兵衛、今だに江戸爲替を届けぬとはどうした事だ。使を遣れば、何のかの言つて追返す。全體どうする積りだ。おふくろに逢つて話さう」と詰る。忠兵衛平伏合掌し、「恐れ入りました。何を隠しませう、其の爲替金は十四日前に参りました。が御存じの通り梅川が田舎客に請出されるといふので、さうなつては私の面目も丸潰れとなる。それが残念さに、梅川と共に情死しようとしたが、邪魔が入つてそれもならず。明ければ十二日貴方への江戸爲替がひよつくり届きました。これぞ命の際の助け船と、懐中にねち込み、跡先の考もなく逸散に越後屋(忠兵衛と梅川とがいつに)に駈附け、女主人と談合して其の五十兩を手附に渡し、やつと梅川が田舎客に請出されるを取留めました。思へばこれも貴方を友人に持つたお蔭、命の親でござると御恩を感謝して、朝晩堂島の方へ向いて拜んでゐます。さりながら断りなしに借りたのは盗んだも同然。どうぞ御推量あつてお赦し下さい。四五日中には外の金も上りますれば、何を措いても屹度お届け申し、決して御損は相掛けませぬ」と、憐みを乞うて泣く。氣丈な八右衛門は之を聞いて同情し、「よう言ひにくい事を自白した。己も男だ、料簡して其の四五日待つてやる。越度のないやうにせよ」とて、別れて行かうとする。妙閑聲を掛け、「八右衛門様の御出でか、お通し申せ」と言つたので、忠兵衛詮方なく八右衛門と共に内に入る。

妙閑「先刻はお使をよこされ、今又御自身の御出で御尤々々。貴方の江戸爲替が参りましたのは十日も以前の事、それをまだお届けせぬとは、忠兵衛どうした事だ。さつさと渡して上げませい」といふ。八右衛門は既に忠兵衛の底意を聞いてゐるので、「いや今入用な譯ではありませぬ。これから長堀まで行きますから、明日でも受取りましょ」とて、去らうとする。妙閑「ちよつとお待ち下され。人様のお金を預つてゐては氣遣ひ、夜もゆつくりと眠られませぬ。これ忠兵衛早うお渡し申せ」といふ。忠兵衛困り果て、ふと見附けた鬘水入を取り出し、駿河包(本文の註参照)にして八右衛門に渡す。妙閑「八右衛門様、爲替金をお渡し申したからは、それと取替に手形をいただきます。若し御持参なさらねば、ちよつと受取證を書いて下され」といふ。八右衛門乃ち妙閑の無筆を幸ひに、滑稽千萬な文を書いて渡し、別れの挨拶を述べて去る。

其の夜更けて駄荷が著き、家内賑はふ。堂島藏屋敷の爲替金三百兩も着いたので、忠兵衛「これは早速お届けせねばならぬ」とて、其の金を懐中し、羽織を被て風寒い真夜中に家を出た。

彼は北へ行く筈を、いつもの通路になれて思はず知らず南へ行き、ひつそりとした米屋町に来て、「はてこれは方角を間違つた」と、はじめて吾に歸つた。然し美しい愛人に逆上り詰めてゐる彼の心は、ちよつと一走り逢つて行かうか、いやそれもなるまい、それでもどうしよかと、思ひ亂れて行きつ戻りつ、女の髪筋に繋がれた身の愚かさは、遂に戀の闇路を新町へ走つた。

評

意思の弱い多情な忠兵衛は、青春の血に燃えて、家業の無趣味と心の淋しさとを感じるやうになつた。そして彼は新町に遊んで甘い縁酒の香に陶醉し、美しい愛人を持つに至つて、空な生活から蘇生つた心地がして全身を打込んだ。其の爲に彼は、外の工面・内の首尾に絶えず心を悩まさねばならぬやうになつた。その最も悩んだのは、愛人を田舎客の爲に奪はれようとした事であつた。彼は之を取留める爲に、八右衛門に渡さねばならぬ江戸爲替に手を附けた。彼の不身持に氣附いた養母や友人が、彼の行末を案ずる心盡しの言葉も、彼には一顧の價値もなかつたのである。

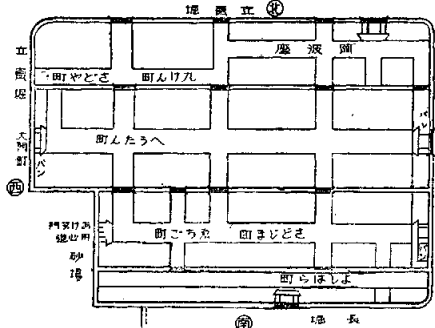
其の後、彼は堂島藏屋敷の爲替金を懐に入れて家を出た。近松はこれを「心は北へ行く」と思ひながらも身は南、西横堀をうかくと氣に染み附きし妓が事、……ちよつと寄つて顔見てからと、立返つてはいや大事、此の金持つては違ひたからう措いてくれうか、行つてのけうか行きもせいと、一度は思案二度は無思案三度飛脚、戻れば合はせて六道の冥途の飛脚」と寫して、やがて歡樂の消え去る時を見せた。

彼は熱烈な戀の爲に身を忘れ、遂には其の身をも情火に燒盡さねば止まなかつたのである。近松はその自然の成行きを、麗しい詞章、巧な表現を以て描いてゐる。吾人はこれを讀む時、近松情調に魅せられて、暫くは美しい詩の國をさまよふであらう。

○濤標 濤つ串の旗で、水筋を示す標をいふ。今大阪市の紋章になつてゐる。こゝは濤標の枕詞の如く用ひた。

○浪華に咲くや此花 古歌「濤波津に咲くやこの花冬ごもり云々」に據つた。そして「花の里」につづけて「花街遊里」新町の意にかけた。

○三筋 大阪新町内の佐渡屋町・瓢箪町・越後町をいふ。そして三絃の意をいひかけた。



新町地圖 (刊年七曆寶) 據にし標濤(刊年七曆寶) 圖地町新 りな方四丁四ほわるく

○佐渡 新町内の佐渡屋町。
○越後 新町内の越後町。そして梅川が度々呼ばれる瑞屋の越後をいひかけた。

忠兵衛 冥途の飛脚

濤標浪華に咲くや此花の、里は三筋に町の名も佐渡と越後の合の手を、通ふ千鳥の淡路町龜屋の世繼忠兵衛、今年二十の上はまた四年以前に大和より、敷銀持つて養子分後家妙閑の介抱故、商ひ巧者駄荷積り江戸へも上下三度笠、茶の湯俳諧・若・雙六延に書く手の角取れて、酒も三つ四つ五つ所紋羽二重も出ず入らず、

○合の手 瑞屋の越後と淡路町との間(あひじ)の道を「問あひじの手」というて、三筋(三絃)の縁語、合の手(歌聲暫く中絶する間に三絃のみを弾じる手勢)をいひかけた。
○通ふ千鳥の淡路町 「金葉集」冬部の歌「淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に、いく夜ねがめぬ須磨の關守」の歌句を以て文を飾り、且つ忠兵衛の住所を示した。淡路町は今大阪市東區内の町名。
○二十の上はまた四年以前 忠兵衛二十四歳と、四年以前に龜屋の養子となつたのを合はせていふ。
○敷銀 縁づく時の持参金。
○介抱 後見となつて指導することの意。
○駄荷積り 駄荷のわりふり方を見積ること。
○三度笠 三度飛脚の被る深編笠をいふ。以て三度飛脚のことというた。大阪飛脚は毎月三度、日数を限つて江戸へ往復した

○延 延紙の略。和州吉野から産出し、大きき縦七寸、横九寸ばかりの小杉原紙である。梓客遊女などはこの紙を懐中し、鼻涙を拭去るなどに用ひるによつて鼻紙ともいふ。
○角取れて 手跡も人物も圭角がなくなり、おたやかになつて。
○五つ所紋羽二重 酒の五杯位は飲める意から、背に一つ、袖に二つ、胸に二つ、以上五つ所に紋を附けた紋羽二重薄く滑かで光澤ある平織絹を羽二重といひ、羽二重を模様織にしたもの(の羽織をいひかけた。そしてこの紋は、木瓜である)とが後文で知れる。
○出ず入らず 過不及なく、程にあひ着こなしよきをいふ。

○象嵌 象嵌塗の輪をいうたのである。即ち模様
の輪郭を金粉又は銀粉で細かく蔭繪にした後、其の
内部に色漆を塗込んで研出色附をした輪。忠兵衛は
町人であるから刀一本ざしである。

○國細工 刀の田舎細工をいうて、以て忠兵衛
が大和の田舎出まは風はれぬめよき男である意を
いひかけた。

○色の譯知り 戀のいきまさを知つて醉なるを
いふ。

○里知り 遊里の事情に通じてゐるをいふ。

○白銀に翼 魯褒の「錢神論」に「無翼而飛、無
足而走」。

○町廻の狀取立て歸つて 町を廻つて委託
書状を取集める者が歸つて。

○留帳附くる 取集めた委託書状を、それ／＼
書留めて置く帳簿へ記入する。

○屋敷 堂島の藏屋敷。中之島・堂島には大名の
藏屋敷が多くあつた。◎藏屋敷を見よ。

○お下し物 江戸へ下／＼くたじま物。江戸へ送附
する物。

○おぢや おいでや。

○あひしらふ あしらふ。挨拶する。とりもつ。

○三度 三度飛脚の略。「さんごがさの條を見よ。

○九日十日 江戸大阪間の飛脚の日数は、八日
を要したものなるによつてかくいふ。

○飛脚の請取證文 爲替證書であつて、之を
添狀、添手形、手形ともいふ。

無地の丸鍔象嵌の國細工には稀男、色の譯知り里知りて暮るを待す飛ぶ足の、飛
脚宿のいそがしき荷を造るやら解くやら、手代は帳面算盤を奥口共にどや／＼と、
千萬兩の遺縁も筑紫東國の取遣も、居ながら金の自由さは、一步小判や白銀に翼
の有が如くなり、町廻りの狀取立歸つてそれ／＼と、留帳附くる所へ「誰を頼も
ふ忠兵衛宅に居やるか」と、案内するは出入の屋敷の侍、手代共懇懇に、「ヤア
是は甚内様、忠兵衛は留守なればお下し物の御用ならば、私に仰聞ケられませ、お
茶持つておぢや」とあひしらふ、「いや／＼下りの用はなし、江戸若旦那より御狀
が來た、是お聞きやれ」と押開き、「來月二日出の三度に金子三百兩差上せ申べく
候、九日十日兩日の中其地龜屋忠兵衛方より、右三百兩請取内々置候こと共埒明
申さるべく候、則飛脚の請取證文此度上せ候間、金子請取次第此證文忠兵衛へ
渡し申さるべく候、是此通仰下された、今日迄届かぬ故大事の御用の手筈が違
ふ、何故斯様に不埒な」と鼻を、しかめて言いければ、「へ、御尤／＼、去ながら
此中の兩續き、川々に水が出ますれば道中に日がこみ、金の届かぬのみならず手
前も大分の損銀、若し盜賊か切取か道からふつと出來心、萬々貫目取られても十

○日が込み 日数がかり。

○切取り 人を斬殺して物を掬め奪ふ者。

○ふつと出来心 ついひよつと悪心が起つて持逃げなどするこゝろ。「ふつ」とは「ふし」に促音の添はつた副詞。

○十八軒の飛脚宿 寛文十二年、飛脚商は金飛脚の看板を掲げて組合營業となつた。そして正徳元年には大阪に十八軒の組合飛脚問屋があつた。

○是さく、これよくと、呼掛けて注意するのである。

○御損かけては忠兵衛が首が飛ぶ この言は忠兵衛の最期を豫言したこゝろになる。

○徒士 徒歩侍「かちざむらひ」の略。主君出行の先驅を徒歩とする侍。

○若黨 若い郎黨。身分低い豪來。

○刀の威光 大小を差す武士の威光。

○うさん 疑ひ怪しむこゝろ。蓋し「胡散の廣東書を傳へたのであらう。こゝの文は、刀の金具が銀やう鉛やら疑はしい意に、爲替銀をこしらへて来るやら疑はしい意をいひかく。

○中之島 今大阪市北區の内。

○小舟町 今東京市日本橋區内の町名。

○添狀 爲替の添手形のこと。爲替證書即ち飛脚の請取證文である。添狀には必ず受取人名宛の支拂約束か、或は支拂委託の文言が記載してある。爲替金額の支拂は、其の添狀を引替に行はれるのである。

冥途の飛脚

八軒の飛脚宿から辨へ、芥子程も御損は掛けませぬお氣遣あられな」と、言はせ

も果てず「是さく、言ふ迄もない御損かけては忠兵衛が首が飛ぶ、日限延びて

は御用の間が明により、それ故の詮索迎ひ飛脚を遣はして、早速に持參せい」と

徒士若黨も刀の威光、銀拵へも胡散成詛散して歸りしが、又「頼みませふ、中

の嶋丹波屋八右衛門から來ました、江戸小舟町米問屋の爲替銀、添狀は届いたが

銀は何故届きませぬ、此中文を進じても返事もござらず、使を遣れば酔の莖弱の

と何時届けさつしやるぞ、此者に渡して人を附けて下され、手形戻そと申さる、

サア、金子請取らふ」と立はたかつてわめきける、主思ひの手代の伊兵衛騒がぬ

體にて「はお使、八右衛門様が其様に理窟臭い口上は有まい、五千兩七千兩人の

金を預かつて、百三十里を家にし江戸大坂を、廣ふ狹ふする龜屋、其處一軒では

○酔の莖弱の 「何の彼のこゝろふ意を、酔に「四の五の」こゝろ、その「し」(四)を「す」(醉)にこゝろ、「ひ」(五)を「莖弱」にこゝろひなして、藥所に用ひる物品の類音に據つた洒落であらう。○酔につけ粉につけといふ意も、これと同類。

○此者に「戻そ、使者が主人の言葉を其のまま取次いで言うたのである。」「この者」は使者自身をさす。

○手形 添手形即ち添狀のこと。

○はたかる 開張の義、手足をひろげる。「倅訓栞」に「大手をはたけなぞいへるは開く義なり。

○口上 口でのべるこゝろ。「倅訓栞」に「口上と書ども口狀なるべし。

○百三十里 「國花萬葉記」卷七下に「江戸日本橋より大坂へ百三十二里半。

○廣う狭うする 飛脚の遲速を以て、距離を伸縮自在にする意にいひなした。

○無うては 無うてはならぬ。有るべきだ。
○あたがしましう いやに驚やかましう。
「あたは悪意の意を示す接頭語。

○嵩から出る 相手を壓する勢で出る。うはてから相手を鬼下りする。嵩高な返事をする。

○納戸 衣服・調度などを納め置く部屋。妙閑は其の部屋に火燵をあけて隠居してゐるのである。

○得ず 受けたことがない。
○鑑と言はれた此龜屋 龜屋(かめい)かん(手本の意)や龜(かめ)の鑑(かがみ)もいへば、それを分けていひかけた。

○呑込まぬ 得心が行かぬ。納得できぬ。
○自體 地體とも書く。もとより。ぜんたい。

○新口村 今も新口といひ、大和國磯城郡多村にあつて、三輪町の西に當り、田原本と八木との間にある。

○わざくれ 自暴自棄。
○悪性狂ひ 色ぐるひ。好色のこころ、悪性といひ、遊廓を惡所といふ。

○世取 あまじり。後編者。
○おろか 破か。不足。

○そはく せはく(杜々)の轉であらう。心おちつかないで、いらくするさま。

○養子の母 妙閑である。

○せはく 杜々。氣いそがしいさま。
○身を 身を穿して。

有まいし遅い事も無ふては、今でも旦那歸られたらば此方から返事せふ、五十兩に足らぬ金あたがしましう言ふまい」と、嵩から出れば氣を吞まれ使は眞面目に歸りけり、母妙閑は火燵の側離る、事も納戸を出てヤア今のは何ぞ、丹波屋の金の届いたは儘十日も以前の事、何故忠兵衛は渡さぬの、今朝から二軒三軒の金の催促聞てゐる、親父の代から此家に銀一匁の催促得ず、終に仲間へ難儀をかけず十八軒の飛脚屋の、鑑と言はれた此龜屋、皆は心も附かぬか、忠兵衛が此比の素振がどふも呑込まぬ、昨今の者は知るまいか自體是の實子でなし、元は大和新口村、勝木孫右衛門といふ大百姓の一人子、母御前はお死にやつて繼母がかりのわざくれに、悪性狂ひも出来るぞとて父御前の思案で是の世取に貰ひしが、世帯廻り商賣事何に愚はなけれ共、此比はそはくと何も手に附かぬと見た、意見のしたい事あれど養子の母も繼母も、同然と思はふかせはく言ふより言はぬ身を、恥入らせふと思ふて目を眠つても聞所、見所は見えてゐる、何時の間にやら大氣になり、延の鼻紙二枚三枚手に當り次第、重ねながら鼻かみやる、過行かれし親父の咄に、鼻紙びんびと遣ふ者は曲者じやと言はれたが、忠兵衛が内を出さまに延

○大氣 氣の大きくなること。
○延 (既出)

○鼻かみやる 鼻をかんでする。
○過ぎ行かれし この世を過ぎ行かれた。逝去された。

○びんびと けち／＼しないさまにいふ副詞。
はつばと。きれいさつぱりぞ。

○曲者 一くせある者、油断のならぬ者の意。
○三折 延壽鐵杖を一極めにしたものを一折とし、それを三つ持つて行くのである。

○よまひこと 世迷ひ言の義。愚痴をいふこと。不平をかこつこと。ひゞりくぜつ。

○笑止がり 氣の滯がり。いたはしがり。笑止はもと勝手(しやうし)であらう。すゝれたことこの義から、難(た)こと、興(き)のさめること、氣の毒(い)なことゝの意に轉じたのであらう。(見索引)

○早う歸つて下され 忠兵衛様が早う歸つて下され。

○戻り足 二この文意は、日も西の空に傾き、忠兵衛も西の方新町から、戻り足といふのである。

○籠の鳥 遊女に喩ふ。遊女は抱主に拘束されて自由の身ならぬによる。

○里雀 遊里をぞめき歩く者を雀に喩へていふ。二この文は、梅川を籠の鳥といふ縁で里雀とつづけ、そして雀の囀聲(さえずり)「チュウ」に忠兵衛をいひかけた。

○とぼく よろ／＼。よろめくさまをいひ、

三折(み)づつ入(い)れて出(で)て、何程(なんぢ)鼻(はな)をかむやら戻(も)りには一枚(いちまい)も殘(こ)らぬ、身(み)が達者(たうしや)なの若(わか)いのとてあ(あ)の様(よう)に鼻(はな)かんで、どこぞでは病(やまひ)も出(で)ませふ」と世迷(よまひ)言(こと)して入(い)りければ、

丁稚(ていぢ)小者(こもの)も笑止(わらや)しが早(はや)う歸(かへ)つて下(くだ)されかしと、待(まつ)日も西(にし)の戻(も)り足(あし)店(みせ)鎖(さ)し比(ひ)に成(なり)けり籠(かご)の鳥(とり)なる、梅川(うめがわ)に焦(こが)れて通(とほ)ふ里雀(さととりの)雀(つば)はとぼく／＼と外(そと)の工面(くわめん)内の首尾(しゆび)、

心(こゝろ)は蜘蛛手(くまづて)かくなはや十文色(じふもんいろ)も出(で)て來(く)るは、南無三寶(なんむさんぼう)日(ひ)暮(く)れると足(あし)を空(そら)に立歸(たつり)、門口(かどぐち)には著(つ)きけれども、留守(りうしゆ)の内(うち)に方々(はうく)の催使(さいし)妙閑(めうかん)の耳(みみ)に入(い)つて如何(いか)様の(やう)の、

首尾(しゆび)になつたも氣遣(きづか)はし誰(たれ)ぞ出(で)よかし内證(ないしやう)を、篤(とく)と聞(き)て入(い)たしと我家(わがいえ)ながら敷居(しきみ)高く、内(うち)を覗(のぞ)けば飯焚(いひたき)のまんめが酒屋(さかや)へ行(い)く體(てい)なり、彼奴(やつ)は木(き)で鼻(はな)もぎどふ者(もの)只(ただ)

雀(つば)の歩(あ)みぶりにいひかけた。

○蜘蛛手(くまづて) かくなわ、十文色(じふもんいろ) 『平家物語』卷四(くわん)橋合戦(はしあひま)の條(ぢ)に蜘蛛手(くまづて)かくなわ十文字(じふもんじ)、蜻蛉返(せみぢがへ)水草(すいそう)など見(み)えて、刀(やいば)を縦横(たてよこ)無茶(むぢや)に振舞(ふりま)ひて意(い)の盡(つ)き茶(ぢや)を應用(えんよう)した。千々(ちぢぢ)に物思(ものおも)ふを蜘蛛手(くまづて)に物思(ものおも)ふといふ。

○かくなわ 結果(けいこ)と奇(き)き、結(むす)ぶを結び、又はひねつたやうな形(かたち)をいふ。以(も)つて物(もの)を思(おも)ひむす除(はず)はることにいふ。二こは忠兵衛(ちゆうべゑ)が風流(ふうりゆう)にくれること。

○十文色(じふもんいろ) 往來(わうらい)の男(おとこ)を見(み)かけて袖(そで)を引き、鏡十文(かがみじふもん)にて淫(よ)を賣(う)る女の義(ぎ)であつて、辻君(つじきみ)をいふ。二この文は、もはや日暮(ひぐり)れ時(とき)であつて、辻君(つじきみ)もまよふといふのである。そして忠兵衛(ちゆうべゑ)の心が縦(たて)横(よこ)に思(おも)ひ亂(みだ)れる意(い)をいひかけた。

○南無三寶(なんむさんぼう) これはしまつたといふ時にいふ語(ことば)。佛(ほとけ)法(ほふ)僧(そう)の三寶(さんぼう)を呼(よ)んで冥助(めいすけ)を乞(こ)ふ意(い)から出(で)た。

○暮(く)れると 暮(く)れると氣附(きづ)いて驚(おど)る。

○足を空(そら) 足(あし)が空(そら)を飛(と)ぶやうに、夢中(むちゆう)になつて急(いそ)ぎ歩(あ)くをいふ。

○木(き)で鼻(はな)もぎどふ者(もの) 『木(き)で鼻(はな)割(わ)ぐ』は『木(き)で鼻(はな)もぎくる』ともいひ、まつぱり情愛(じやうあい)なき意(い)にいふ語(ことば)。「もぎやうはば」も「もぎやう」(動原(どうげん)の音便(おんべん)か。邪慳(じやくん)不愛(ふあい)戀(こひ)存(ぞん)なく一徹(いつてつ)者の意(い)にいふ。

○濡れ 男女惚れて、しなだれるをいふ。「色道大鏡」に「ぬれは當世の名目なり、ほれたる貌なり、思ひよりたる風情をしなし、言ひなす處をさしていふ」

○すゝぬ 推であつて、推量又は推察の義。世間人情を察知通曉すること。花柳社會や藝人間の事情に通じ、意氣なこゝにもいふ。粹は當字。

○首だけなづむ 頸丈即ち全身を打込込んで執着する。

○思ひ内にあれば色外に現はる 心に思ふことあれば、物思ひの有様が顔色に現はれること。意。この語は謡曲「鹿野」「松風」などにも見えてゐる。

○氣の毒がらす 我が心を苦しめ惱ましめる。我が心を慥愴させる。「氣の毒」は「氣の毒」の反切。

○新町 新町遊廓。今大阪市西区内。新町の地圖は既出の「三筋」の條に載せた。

○手鼻もかみ 指先で鼻の端をつまみ、鼻息を以てはなせるを排出するをいふ。以て寄り附くもいやたらうとの意にいふ。

○しつほり しつほり。しめやかなさま。しんみり。

○に 「なし」の轉。

○うそ 「うすし」(薄)の語根「うす」の轉。ここの文は、うすく腹の立つを「立ち煩らひて」にいひかけた。

○いかつげ いかめしげに。

○むつかし わづらはしい。面倒くさい。

○此中は久しい 近頃御無沙汰した。

は言ふまじ濡れかけて、騙して問はんと思案する間によつと出る、樽持つた手をしかと締むれば「あれ日那様の」と聲立る「ア、喧しいこりや粹め、己が首たけなづんでゐる、思ひ内にあれば色外に現はる、目附を其方も見て取たか可愛らしい顔附で、氣の毒がらすは如何じやいやいつそ殺せ」と抱附は「ム、嘘吐かんせ、毎日〱新町通ひ、延の鼻紙二折三折、結構な鼻をかまんすもの、何の妾等に手鼻もかみたふあるまい、あの嘘吐きが」と振切るを又抱附いて「そちに嘘吐いて何の得、實じや〜」と言ひければ「それが定なら晩に寢所へござんすか」、「ヲ、成程〜忝い、それについて今ちよつと問ふ事有」と言ひけれ共、「それも寢所でしつほりと聞ませふ必らず騙しにさんすなるゑ、そんなら妾はお湯沸いて、腰湯して待ます」と言ひ棄て振切り走りけり、忠兵衛はうそ腹の立煩らひてゐる所に「北の町からいかつげに来るは誰じや、ヤア、中の嶋の八右衛門、彼奴に逢ふてはむつかし」と、東の方へ出違へば「是忠兵衛、外すまい〜」と聲掛けられ「ヤア八右衛門此中は久しい、昨日も今日も一昨日も、人遣ろ〜と思ふて何や彼やと延引した、めつきりと寒いが親父の疝氣は婆様の蟲齒は、ア、い

○痲氣 漢方の病名。男子の大小腸又は腰部などの痛む痲氣で、その痛み足に下る事もある。また毒丸が痛み服れる時は、快方に向つたものとされてゐる。

○いからう いかく(殿)の音便。きつう。甚だしう。

○れそ 「それ」の倒さ語。八右衛門の馴染の遊女をさした粹詞。

○一座 同座。

○たくしかくる 手繰掛たぐりかくの義。つづけざまにいひかける。以て八右衛門をまるめ込まうとするのである。

○口三昧線に乗せる 巧に調子づかせてこまかす。舌頭で人を騙弄する。

○三度 三度飛脚の略(既出)

○高駄賃 「國花萬葉記攝津の巻、江戸飛脚の條に「七日限金百兩に付賃三十五匁、八日限金百兩に付賃二十五匁」と見え、「仕法體賃金定」には「京都大坂迄七日限幸使金百兩賃銀四十五匁、同八日限幸使金百兩賃銀三十五匁」とある。この文意は、高額の爲替料金をかけるのであるから、飛脚商の方で、高額な爲替料金を取つてゐる大切な要素であるといふのである。

○嵩高な 相手を見くわして横柄なるをいふ。

○北濱 大阪中之島の川南の地をいひ、米穀取引商人など豪商の多かつた所である。

○鞆 今大阪市西區内。魚市場の多かつた所であ

かふ酒臭い過しやるなく、明日は早々人遣らふやれそが言傳したぞや、近日一座致したい」とたくしかくれば八右衛門「措けやい、口三昧線に乗せ掛けても乗る様な男でない、其方が商賣は三度でないか、身が方へ上つた江戸爲替の五十兩は何として届けぬ、五日三日は料簡も有ぞかし、心易いは各別高駄賃掛くからは大事の家職、十日に餘れど埒明す今日も使を遣つたれば、手代めが嵩高な返事した、よもや脇へはそう有まい八右衛門を懸るか、北濱・鞆・中之嶋・天満の市の側迄、親父共言はるゝ八右衛門、懸つてよくは懸られふが金は今日請取、但仲間へこたへふか先お袋に逢はふ」と、内へ入を引留め「さりとは誤つた、是手を合はずたつた一言聞てたも、拜む」と囁けば「又口先で濟そふや、梅川を騙したと男のいきは違ふた、言ふ事あらばサア聞かふ」と苦々敷極め附られ「是其聲

○天満の市の側 大阪の天神橋北詰上から羅田町までの濠側をいひ、膏物市場などあつた所である。

○親父 親分。

○仲間 飛脚宿仲間。前文に「萬々重目取られても十八軒の飛脚宿から拜へ」とある。

○お袋 神間をさす。(見葉引)

○濟さうや 濟さうとするか、まうはせぬ。

○いき 行き即ち行き方。氣袋のおもむく所。この文は、汝は梅川を甘言で騙したの、それと同じやうに八右衛門を騙さうとしても、男なるおれの心の行き方は、梅川なる女とは違ふぞ、騙されるものではないとの意。「違うた」の「た」は、過去ではなくて、決定の意を示したものである。

- 一分 面目。(見索引)
- 金づくめ 金銭の限りを出し盡すこと。の義。金方。
- へつり銀 へつり取つた金。掠め取つた金。
- 追倒おしだされて 金づくめに壓倒されて。
- 手を打たぬばかり 取引なきの話し合ひが成立した時は、手を打つ例である。其の手を打たぬわけになつてゐる。
- 川 梅川の略。廓詞は、人の名を略していふが例である。
- ひいやり 肝臓を茶かしめる義。ひやり。
- 江戸金 江戸爲替の金。
- ふらり ひよつくり。あいた口に牡丹餅のさま驚し得て妙。
- 宿 湯屋をいふ。こは忠兵衛・梅川の立寄る越後屋の女主人をさす。
- 根引 請出し。身請け。
- 手附 契約履行の保證として相手方に交附する金。
- まんまと うまく。首尾能く。
- 北に向ひて 八右衛門の宅は中之島にあつて、淡路町からは北に當れはかくいふ。
- 同然 同然なれども。
- 跡ではいかか 無断で使つた跡で、借りたと言つたではいかか。それは借りたのではなくて、盗んだことにならう。

を母が聞けば死んでも一分立たぬ事、一生の御恩をさりとては面目ない」とはらはらと泣きけるが、何を隠そふ此金は十四日以前に上りしが、知つての通り梅川が田舎客、金すくめに張合かける、此方は母手代の目を忍んで、僅か二百匁三百匁の削り銀、追倒されて生きた心もせぬ所に、請出す談合極まつて手を打たぬばかりといふ、川が歎き我らが一分既に心中する筈で、互の咽へ脇差の冷りと迄したれ共、死なぬ時節か色々々の邪魔附いて、其夜は泣いて引別れ明れば當月十二日、貴方へ渡る江戸金がふらりと上るを何かなしに、懐に押込んで新町迄一散に、どう飛んだやら覚えばこそ段々宿を頼んで、田舎客の談合破らせ此方へ根引の相談締め、彼の五十兩手附に渡しまんまと川を取止めしも、八右衛門と云男を友達に持し故と、心の内では朝晩に北に向ひて拜むぞや、さりながら如何に念比なればとて、先に断立置いて使へば借るも同然、跡ではいかかと思ふ内其方からは催促、嘘に嘘が重なつて初手の誠も虚言となれば、今何を言ふても誠には思はれじ、され共遅ふて四五日中外の金も上る筈、如何様共仕送つて一錢一字損かけまじ、此忠兵衛を人と思へば腹も立つ、犬の命を助けたと思ふて料簡頼み入、

○一字 字も文も同じものと見て、一字は一文で、一文は幾一文の意。

○是を思へば：絶えぬも道理 この文は、「此上は：外はなし」の文のつぎにつけて見るべきである。

○仕置者 處刑人。「仕置」は刑罰の意。

○此上は 誠には思はぬ上は。

○涙ぐみ 八右衛門が忠兵衛に同情して涙ぐむ所を見れば、彼は決して忠兵衛を憎んでゐないことが知れる。但し鬼とも組まん程な強氣な人であるから、鋭い氣質であつた事も知れる。

○さう思へば満足 汝がさやうに思へば我も満足だ。

○其の内 其の内にまたも逢はう。

○律儀 律儀とも書く。眞面目。正直。

○底意 忠兵衛の心底。ここの文は、忠兵衛が窮して八右衛門の爲替金を無断で流用した、その心底を自白したことを八右衛門も聞いてゐるこの意。

○恥かしながら 富婆と思はれては恥かしい次第ですが。

○長堀 大阪新町遊廓の南手の川を長堀川といひ、その沿岸。

○きり／＼ てきほき。さつさつ。(見栄け)

是を思へば世の中にお仕置者の絶へぬも道理、此上は忠兵衛も盗みせふより外は

なし、男の口から斯様の事言はれふものか推量あれ、咽より劍を吐くとても是程

には有まじ」と緩り、泣にぞ泣居たる、鬼とも組まん八右衛門はろりつと涙ぐみ、

「言ひにくい事能ふ言ふた、丹波屋の八右衛門男じや料簡して待てやる、首尾能

うせよ」と言ひければ忠兵衛土に額を附け、「忝い／＼父二人母三人、親は五

人持たれ共其恩よりは八右衛門、貴殿の御恩忘れぬ」と兎角は涙ばかりなり、さ

う思へば満足サア人も見る其内」と、立別れんとせし所に内より母の聲として、

「ヤア八右衛門様か忠兵衛是へ通しましや」と、聲掛けられて詮方なくもぢ／＼連

立入にけり、母は律儀一遍に、「先程はお使又御自身の御出御尤／＼、是彼方の

金の届いたは十日も以前何として延引ぞ、胸にとつくと手を置いて能ふ思案して見

や、遅ふ届けば飛脚は入らぬ、何が其方の商賣ぞ、サア今渡して上げましや」と

言へ共渡す金はなし、八右衛門も底意は聞「是はおふくろ、恥かしながら八右衛門

が五十兩や七十兩、急に入事もなし是より直に長堀まで参れば、明日でも」と立

んとすれば「いや／＼、大事のお金預れば氣遣で夜も眠られず、なふ忠兵衛きり

○神おろし 神靈を招請すること。

○鬘水入 陶器或は漆物或は竹製もあつて、其の形楕圓形で厚さ一寸ばかり、小判を重ねたやうな形をなす。これに伽羅油を入れ、或はさねがづらの莖を細かく削つて之に浸し置いて、そのねほり汗で鬘髪のをそけを理め鬘を出したのである。こゝは鬘水入を以て五十兩の形に見せた。

○駿河包 元祿金銀歌替前は江戸・京・駿河・佐渡で小判を造つた。これ等の座で小判を包むに一定の方法があつた。駿河包は駿河小判の包方であつて、即ち紙で小判を巻いて、其の端を紐で括つたものである。

○墨黒に 墨黒に書き。

○五十杯 人を款くを、誰に「一杯食はずといふ。「五十杯は五十兩を款く縁によつたもので、甚むしう款く意にいうた。

○一杯参らせし 一杯食はせた。

○男を立つる 男の意氣をみがく。前文に「丹波屋の八右衛門男がや」とあるに應じる。

○たもる たまはる。下さる。

○不動参りに待ちまする 大阪北野稻荷山の雨不動寺に参詣なさる時にはお立寄り下さい、お待ち致しますとの意。忠兵衛の居所淡路町から不動寺に参るには、八右衛門の居る中之島を通るによつてかといふ。「攝津名所圖會大成」卷十一に「不動寺」毎月三日八日十六日廿八日諸人群参して大に賑わし、すべて此邊を北野と號す。

○仕切爲替 仕切手形を添へた爲替。仕遣り爲

きり渡しや」とせり立られ「あつ」といふより納戸に入、うろ／＼しても金はなし入れもせぬ戸棚の錠、明ける顔してびんといふ鍵の手前も恥かしく、胸に願立神おろし狂氣の如く氣を揉みしが、「ヤレ有難や此櫛箱に焼物の鬘水入、これ氏神」と三度戴き紙押廣げくる／＼と、駿河包に手ばしこく「金五十兩」墨黒に、似せも似せたり五十杯、母には一杯参らせし其の悪智恵ぞ物體なき、是々八右衛門殿、今渡さいでも濟む金ながら母の心を安める爲、男を立る貴方と見て詮方なふ渡す金、さつぱりと請取て母の心を安めてたも、包は解くに及ぶまじ觸ふて見ても五十兩、如何してたもる」と差出す八右衛門手に取て、「ハテ誰ぞと思ふ丹波屋の八右衛門、請取に子細は無い是はおふくろ、江戸爲替儲に請取ました、不動参りに待まする」と立所を、妙閑誠と思ひてや「是忠兵衛、仕切爲替の作法は金と手形と引替へ、若し御持参無きならば一筆ちよつと書かせましや、物は念じや」と言いければ、「ヲ、それ／＼母は無筆の一字も讀まれねど、印ばかりに一筆」と硯出して目くばせすれば、「易い事／＼忠兵衛文言は見や」と、筆に任せて書き散らす、
一「金子五十兩請取申さず候、右約束の通晚には廊で飲みかけ、我らは替間實正

袴持。

○御持參 手形御持參。

○念ぢや 念を入れておくべきだ。

○一金子：件の如し この證文は阿房口たらんぐであるが、後に八右衛門が越後屋を訪ふ伏線となるもので、作者の用意が見られる。

○紋日 「ものび」(物日)の轍。紋日はその音によつた當字。服の日をいふ。紋日には遊女は衣服を着飾つて全盛を競ひ、遊客は揚屋・遊女などに設備を遣つたものである。

○件 「くわりし」同じ。前の箇條。

○書いた物こそ物言へ 證文が物を言ふ。書いた物が證據だ。

○佛の顔も三度飛脚 佛のやうに善心で人を疑はぬといふに、「佛の顔も三度搦づれば腹立つ」といふ證を應用して、「三度飛脚」につづけた。いかに佛のやうな温良な親でも、度々騙せは遂に怒るゝの意をいひかく。

○左右 通信。

○中戸 商家などの店庭から中庭に入る戸口。

○中戸々々とは、中戸をあけて中戸をあけてよ呼ばるのである。中戸をあけて荷物を奥の倉などに運ぶのである。

○機嫌 もと機嫌であつて、そしりきらふ義人のそしり嫌ふことを伺ふ意。轉じて意向、心地、氣合。

○拍子 運の意。

明白也、何時成共、驢の節きつと參上申べく候、よつて紋日の爲替水入件の如し」

と、阿房のたらんぐ書き散らし「さらばお暇申そふ」と、表へ出れば妙閑は「書

いた物こそ物言へ」と、又騙されし正直の親の心や佛の顔も、三度飛脚の江戸の

左右待夜もやうく更けにけり、表に馬の鈴の音「こりや」駄荷が著いたぞ、

中戸々々」と聲高に手々に葛籠かたげ込む、忠兵衛親子機嫌能く「サア拍子が直

つた來年も仕合馬、馬士衆に酒よ煙草よ」と、硯控へつ帳附て家内どんどと賑は

へば、手代の伊兵衛氣疎げに、「なふ堂嶋のお屋敷から、金三百兩九日に來る筈先

狀が上つた、何とて遅いとお侍の甚内殿が、睨附て歸られた何と」と言ひ

ければ、宰領が打がいより「其三百兩合點、是急々の御用今夜中にお届け」、方々

の爲替金高八百兩ぐはらりくと取出す、忠兵衛いよく勢よく「白銀は内藏

○仕合馬 駄馬の腹當の布に、圓形の中に「仕合なごま書いたならばしがある(日本水代藏卷)、初午は乗つてくる仕合の條の挿書にも見ゆ)により、それを馬につづけて、「仕合うましの意にかけた。

○氣疎げ うごましか。にがくしか。

○先狀 送金到着以前に送金を知らず書狀。前文に「來月二日

出の三度に此證文忠兵衛に渡し申さるべく候」とあるのが、即

ち先狀である。

○宰領 駄馬を牽り行く者。馬四五駄に宰領一人附いて行く。

○打がひ 金銀を入れる圓卷の條。夏山雜談に、打刺は狩の時、犬の食物を入れて、犬衆の疑につける袋から採用した語といふ。(打違に帯びるよりの稱であるともいふ)。

○ぐわらり 「がらり」とも書く。有金すつかり。

○結ぶ 簾になるを、簾を結ぶといふ。ここの文は「簾を結ぶ」と「簾を結ぶ」とをいひかく。

○北 堂島をさす。

○南 新町遊廓は南にあれば、かくいふ。

○西横堀 淡路町から新町遊廓に行くには西横堀をよくさす。

○妓 遊女梅川をさす。梅川とは盲目的な戀、白熱の戀たるを示してゐる。

○米屋町 大阪市東區南本町に當る。「攝陽奇觀」卷之四、片栗の芦の條に「南本町、世俗米屋町といふ」。

○氏神のお誘ひ 運好く出合ふことを「神の引合はせ」などいへば、かくいうた。

○措いてくれう 梅川を訪ひに行くを止むにしよう。

○三度飛脚 思案三度日には飛び行くを、「三度飛脚」にかけた。

○六道 地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上をいふ。衆生は此處に死し彼處に生じて、六道に輪轉す。よつて六道を冥途に通ふ道の意にいふ。近松作「心中刃は水の朔日」下之巻道行に「此世からさへ踏み迷ふ、六道の辻覺束な」。三度を繰返せば六度なるをいひかく。

○冥途の飛脚 飛脚商忠兵衛が梅川に逢ひたさに、思案の末遂に新町へ赴いたのは、その爲に爲替金三百兩を横領して死罪に處せられる事となるので、かくいうた。そして本曲の題名もこれより出づ。

へ、金子は戸棚へ母者人私は直に此小判、お屋敷へ持参する人の金を預ければ、表も氣を附け、早ふ締め火の用心が一大事、戻りはちつと遅ふても駕籠で行けば氣遣ない、夜食仕舞ふて早寝よ」と金懷中に羽織の紐、結ぶ霜夜の門の口出駱れし足の癖になり、心は北へ行々と思ひながらも身は南、西横堀をうか〜と氣に染み附し妓が事、米屋町迄歩み來て「ヤア、是は堂嶋のお屋敷へ行筈、狐が化すか南無三寶」と引返せしが「ム、我知らず爰迄來たは、梅川が用有て氏神のお誘ひ、ちよつと寄つて顔見てから」と、立返つては「いや大事、此金持つては遣ひたからふ措いてくれふか行つてのけふか行きませい」と、一度は思案二度は無思案三度飛脚、戻れば合はせて六道の冥途の飛脚と

○三重 この名稱もと聲明から出た語で、三絃の調子の高い一種の頭き方である。人の聲音は三絃の三重の調子に合はせて唄はれない爲に、語らないこともあれば、従つてその文句も略される事がある。こゝも「なりにけり」などの、文句の略されたものである。(見索引)

中之卷 (越後屋)

登場人物の主な者

梅 <small>うめ</small>	川 <small>がは</small>	清 <small>きよ</small>	豊 <small>とよ</small>	川 <small>がは</small>
高 <small>たか</small>	見世女郎・越後屋の抱 <small>か</small>	忠兵衛の愛人 <small>あいにん</small>	屋の女主人 <small>やのめしゆじん</small>	梅川の朋輩妓 <small>うめがわのともばいぎ</small>
丹波屋八右衛門 <small>たんばややへゑもん</small>	中之島米穀商 <small>なかつしまこめこくしやう</small>	忠兵衛の友人 <small>あいにん</small>	瀨梅川の朋輩妓 <small>せうめがわのともばいぎ</small>	千代 <small>ちよ</small>
玉 <small>たま</small>	越後屋の下女 <small>えちごやのしもめ</small>	兵 <small>へい</small>	衛 <small>ゑい</small>	淡路町飛脚業龜屋 <small>あわじまちひやくしやうかめい</small>
		兵 <small>へい</small>	衛 <small>ゑい</small>	養子・二十四歳 <small>やしよこ・にじゅうよんさい</small>
		兵 <small>へい</small>	衛 <small>ゑい</small>	越後屋の下女 <small>えちごやのしもめ</small>
		兵 <small>へい</small>	衛 <small>ゑい</small>	越後屋の下男 <small>えちごやのしもおとこ</small>

梗概

大阪新町遊廓佐渡屋町越後屋の二階に、梅川の朋輩妓豊川・鳴戸瀨・千代歳等が寄集つて、火鉢酒を酌み交はし、本拳の遊戯に興じてゐる。

温順で濃艶な姿の梅川は、田舎客に招かれて嶋屋に居たが、愛人忠兵衛を忘れる事が出来ず、彼といつも逢ふ越後屋に逃げて来た。越後屋の女主人清は、「梅川様ようお出で」と、取持つて二階へ上げる。梅川の朋輩妓等は、梅川に酒を勧めて拳の仲間入りを頼んだが、梅川は「あゝ酒はいや。拳をする氣もあらばこそ。この梅川が今の身を少しは泣いて貰ひたい」と泣き入つて、愛人との仲を野暮な田舎客に割かれて、請出されようとするを諷つた。これを聞いて一座の者も、同情の涙にくれたが、「あゝ氣が沈んだ。禿どもちよつと竹本頼母様を呼んで来い。あの人の淨瑠璃を聞いて慰まましよ」といふ。梅川は「頼母様は越後町の扇屋へ行かれたと聞きました。妾は頼母様の弟子なれば、能う似た所を語りましよ」とて、夕霧の昔を今に引掛けて、「三世相(近松)の文を語る。

この時、八右衛門は九軒町の方をぶらついてゐるが、其の淨瑠璃を聞附けて來り、「ヤア皆知つた妓様のお集り。清さんは居る

か」とて、つつと上がり、柄差箒を逆手に執つて板敷を突鳴し、「其の淨瑠璃あんまりだ。いかなる男でそれ程に戀しいか」と喚いた。

梅川は彼とは知らず、「戀人に逢ひたいはあたりまへよ。それが憎いなら来て叩かんせ」と答へたが、清から八右衛門が來てると聞いて、「これ皆様、妾はあの人に逢ひともない。妾か爰に居るを知らせて下んすな」と頼む。朋輩妓は「承知しました」とて、梅川を残して二階を降りる。

八右衛門は「ヤア千代歳様・鳴戸瀬様や方々の御會合。梅川殿は背の口から嶋屋の客をこつとわつて出られたけなが、忠兵衛はまだ見えぬか。彼が事に就いて話して置きたい事がある」といふ。

折から忠兵衛は、狐にだまされた如く、心は有頂天、新町橋をとほくと、西へ渡つて越後屋の前に立つた。そして内を覗き込んだ。室内には八右衛門上座を占め、「これは忠兵衛を憎んで言うではない」とて、彼が梅川を請出す資力なく、金に切迫した境遇を述べて、鬻水入を取出し、「先日忠兵衛が此方へ梅川を請出す契約金五十兩を渡したのも、實は己の江戸爲替五十兩を拂はないうで流用し、己には其の代りにこの鬻水入を渡した。これも實は十八文。いかに相場が安いとて五十兩を二分五厘替とは、紀元以來無い事。人間も斯うなつては拘摸から強盜となり、果は獄門首になる、彼の身の成る果がかはいさうだ。それ故どうぞ彼を寄せ附けぬやうに頼みます。梅川殿へもこれを聞かせて忠兵衛と縁を切り、さつさと田舎客に請出させてしまはせたい」と語る。これは勿論忠兵衛の爲を思つての言葉であるが、其の舌はあまりに辛辣であつた。

梅川は二階でこれを聞き、身を悶えて泣き入る。忠兵衛は戸外で立聞きして、其の言葉を深く味ふ餘裕なく、激昂して捨身となり、駈入つて八右衛門を罵倒する。そして藏屋敷に届けようとして懐中せる爲替金三百兩の封を切つて、五十兩を掴み出し、「この忠兵衛が人に損をかけぬ證據、さあ受取れ」とて、八右衛門に投附けて口論に及ぶ。されども忠兵衛の怒號は、何となく哀れで、弱い人の弱い齒向ひの如く聞えた。梅川は涙を拭ひつつ二階から駈降り、「八右衛門様のお言葉すつかり聞きました、皆

お道理でござんする。妾にめんじて勦辨して下さんせ」と頭を垂れ、眞實を傾倒して愛人を諫めた。然し短氣な忠兵衛の憤怒は、之が爲に更に梅川に對する熱愛の上塗となり、「いや梅川心配するな。これは己が龜屋へ養子に來た時の持參金、それをこの度の費用に取戻した」とて、二百十兩を梅川の身請や借金の返済や祝儀にばら撒いた。そこで越後屋の人々は俄に勇み立ち、梅川の朋輩妓は梅川に喜びを述べて、歡聲に満ちた。

八右衛門は忠兵衛の言葉に不審を懷き、誠とは取れねども、人はただで貰つてゐる金を、返金すると言はれて受取らぬは無用の辭退と思ひ、五十兩を懷に納めて爲替手形を投出し、妓等に會釋して去る。其の後朋輩妓も去り、清は下女を連れて梅川身請の手續に出で、人ずくなになつて、夜は沈々と更ける。

忠兵衛は心の次第に平靜に歸るにつれて、己が犯した罪を怖れ、且は寸時も早く梅川を連去らうとする執著に、胸は張裂げんばかりになり、遂に梅川に對して、今のばら撒いた金は、藏屋敷に届ける爲替金であつた事を打明けた。ここに於て梅川が愛人に請出される事を喜んだのは、束の間にはかない夢となり、はては破滅の巖頭に立つ悲哀と變つた。

やがて身請の手續も濟み、大門を出る事も許可されたが、相思の兩人は思ひ餘つて、越後屋の人たちと夢中の挨拶を取交はし、逃げるやうに靡を出る。

評

うら若い多血質な忠兵衛と、濃艶で温順な梅川とが、熱烈な戀に落ちて夢中となる、其の自然の成行を巧に描いてある。そして忠兵衛の友八右衛門が、相思の兩人に好意を持ちながら、却つて其の爲に、彼等の破滅を早めた毒舌を寫して、人情の機微に觸れてゐる。其の間に溶けるやうな新町遊里の背景を點綴して、まことに情味豊かな妙文である。

○恠い／＼鳥がな：逢はうとき 蓬蓬小歌「月夜の鳥ははれて鳴く、我も鳥か、そなたに體れて泣く」を、海老屋節に改作したものであらう。「伊達艇五人男」の中にも、これに似たものが出てゐる。

○浮氣烏 ぞめいて歩く浮氣者をいふ。阿波座をぞめいて歩く者を阿波座の鳥といひ、旅に馴れた者を旅鳥といふの類である。

○逢はう 鳥の鳴聲をいひかけ、そして同じ頭音の青編笠につづけた。

○青編笠の紅葉して 新町遊廓の夜見世に焚く炭火が、遊客の青編笠に映じて紅葉色になるの意で、青に對して紅葉と受けた。「青編笠」は青くて新しい編笠。遊客が編笠を被るは當時の風俗で、西鶴本や「人倫訓蒙圖説」などにもその圖が載つてゐる。「人倫訓蒙圖説」七、鴨原の茶屋の條に「六尺(鶯籠昇) ひざり先へ走り、茶屋の表通りさまに、誰様お出でと傳ふれば、内より能うお出でと、いふより早く焼印の編笠持來りぬ、大盡は：駕籠よりあり、忍び編笠深くかむり云々」。即ち遊客は大門口の茶屋で編笠を求め、之を被つて遊廓内に入ったものである。

○炭火 俳諧連句に「元祿年中まで夜見世に行燈なく、炭火にて顔を見せたり」とある。日が暮れば炭火を焚き、その火影で遊女の顔を見せたのである。

○夕べ迄 新町遊廓の夜見世は、延寶年中に正月から十月まで許可された。十一月十二月も許可されたのは享保年中のことである。ここは享保前の師

中之巻

恠い／＼鳥がな鳥がな、浮氣烏が月夜も闇も、首尾を求めて逢をふ／＼とき、
青編笠の、紅葉して、炭火ほのめく夕べ迄思ひ／＼の戀風や、戀と哀は種一つ、
梅芳しく松高き、位はよしや引締めてあはれ深きは見世女郎、更紗禿が知邊して、
橋がかけたや佐渡屋町越後は女主とて、立寄る妓も氣兼ねず底意残さぬ、戀の
洲、身の憂き鹽で梅川も爰を思ひの定宿と、餘所の勤めも缺きの本嶋屋をちよつと
嶋隠れ、申請さん、今日は嶋屋で彼の田舎のうてずに、せびらかされて頭が痛い、
忠様はまだ見へぬかゑ、せめての縁に此方様の、顔が見たさに貸しに來た」と、
入るさの門の障子戸も明くる朝の形見かや、さつても能ふござんしたあれ二階に
も女郎様たちが、大勢遊びにござんしてお客待つ間の酒事、拳をしてござんする
此方さんもお氣晴しに、一拳して酒一つ傍輩様もござんす」と、上がる二階の際
間風男交せずの火鉢酒、拳の手品の手も懈く、ろませさい、とうらい、さんな、

走のごとであるから、夜見世は日暮れ迄である。

○戀と哀れは種一つ 戀し〜思ふ心も、可愛々々哀れに思ふ心も、全く同一の情である。

○梅 天神さもいひ、太夫の次位の遊女。○てんじんを見よ。

○松 太夫をいひ、最高位の遊女。○太夫を見よ。

○見世女郎 端女郎さもいひ、店頭の格子内に出張つて客を招く下位の遊女である。この文意は、梅もかうはしく松もけたく、いづれも位高き遊女で決してわるくはないけれども、然し情濃かかはゆく思はれるのは見世女郎であるとの意。忠兵衛の愛人梅川は見世女郎である。

○更紗袴 更紗の著物を著てる袴。「更紗は用器的な種々な模様を染込んだ布帛で、もと舶來品であるが、我國でも作るやうになつた。」袴は遊女に事へてその見習をする少女で、將來遊女になるもの。袴着ちでなくて遊女さなり、初めて客を取る者が突出女郎といふ。

○橋がかけたや佐渡屋町越後 「松の落葉」巻七、五尺手拭のはやり唄に、「佐渡さよよこの越後は佐渡さ、越後はすぢむかひ、はしをいよこのかきよやれ、橋をかきよやれ舟橋を」とあるに據つた。「佐渡屋町」は新野渡内町の佐渡屋町をいふ。「越後」は佐渡屋町にある湯屋の屋號である。

○戀の淵身の憂き躰で梅川 胸深蔵藏する戀にうき身をやつた梅川の意に、「淵にて淵を埋む」の語をいひかけた。この語は「毛吹草」にも出で、「毒で井を埋む」と同じ意で、何の效もなきをいふ。

同じ事とよ豊川に、聲の高瀬がさす腕には、「はま、さんさう、ごう、りう、すむろれく何と、自體一つは鳴戸瀬様、あれ梅川様のごさんした」なふ好

以て梅川の徒らに戀の爲に悩む意をきかせた。

○缺きの本嶋屋をちよつと嶋隠れ 梅川が忠兵衛に風ひ焦れて他の助めを缺くを、楠本にいひかけた。そして楠本人慶の歌「はのほの明石の浦の朝霧に高隠れ行く舟をしご思ふ」の中の句を用ひて文飾した。「缺きの本」の句には、「缺き」は楠本人慶の「楠本」の三つをいひかけた。梅川が田舎客に招かれて嶋屋に掛けられてるを、垣の許に隠れて嶋屋を連れ出た意である。

○清 越後屋女主人の名。

○打てず 拍子の打てぬこととの義。問抜け。野暮。

○せびらかされ いぢめられ。「艶容女無衣」に「阿泉めが餘所の子にせぶらかされたな」。

○せめての縁 忠兵衛に逢はねば、せめて忠兵衛といつてもここで逢つた女主人の清々、其の縁故に見て心を慰めようと思ひ。この句、梅川が忠兵衛に對する白熱の戀を示した。

○貸し 客に掛けられてる遊女が、他の客のさころへ行くを貸すといふ。客に買はれてる遊女が、他の客の所へ行くのであるから、遊女は他の客に身を貸すことになる。

○入るさ 入る方。「さ」は方向「ま」をいふ接尾語。

○明くる朝の形見かや 梅川と忠兵衛とが、いつも夜明けがたこの入口で別れた、その後朝「さぬく」の思出かやミの意である。そしてその裏に、今晚来たを最後に、この入口が明朝からは長く思出さることだらう、の意を暗示したものである。

○拳 兩人互に五指を屈伸して出し、兩人の伸べてゐる指數を、併せて言ひあてたのを以て勝する戲。

○手品 種々の品をする手つき。

○ろませ 六。

○さい 掛聲。

○とうらい 十。

○さんな 三。

○同じ事とよ豊川 拳の手同じ事さよとのさよに同韻語豊川をいひつづけた。豊川は拳をしてゐる遊女の名。

○聲の高瀬がさす腕 高瀬が高瀬で腕を突出して拳をする意。高瀬は拳をしてゐる遊女の名。そして豊川の「川」から、「高瀬」さよ、「流水の涌つて来るをいふ」。「腕」の縁語を以て文を飾り、なほ「はま」に韻をいひかけた。

○はま 八。

○さん 三。

○さう 九。

○ごう 五。

○りう 六。

○すむろ 四。

○一つは鳴戸瀬様 一つは成る口（酒も一杯位は飲める口の意、即ち酒も少しは飲める口）に、鳴戸瀬をいひかけた。鳴戸瀬は明瀬妓の名。

- しつけられ してやられ。やつつけられ。
- 直しや 酒の煙のさめてゐるを温かくせよ。
- うたて 物笑いやな。
- 宿 勘屋(見索引)
- 勢力 ちか。勢力はねをり。
- 手附 土之巻に「五十兩手、附に渡し、まんまど川を取止めし」とある。
- 屋敷方 藏屋敷方。
- 歴々の町方 家柄身分などの高くて、いちじるき町人衆。
- 天神 太夫の次位の遊女の稱。
- 太夫 最上位の遊女である。
- さもしい 金に気がふれた 賤しむべき金に心が迷はされた。
- 見世女郎 (既出)
- 掃部殿 當時新町に賣花の遊女掃部殿をいうたものか。(或は俳優中村歌門をさかしたものか。)
- 格子女郎 當時の遊女屋は格子造りであつて、そこに出張のよりいひ、見世女郎のことである。(但し天神をいふことある。)
- 面が脱ぎたい 情婦といはれて忍んでゐたのであるが、それを脱しておもてむき附れて夫婦になりたい。
- しみづきて 濡れ潤ひて。涙に袖をぬらして。
- 禿 (既出)
- 竹本頼母 竹本筑後孫の高弟で、美聲を以て

い所へ来てくだんした、此方さん拳の上手、宵から千代歳様にしつけられて無念な、敵取つてくだんせ銚子直しや」と言ひければ「ア、うたての酒や拳をする氣もあらばこそ、此梅川が今の身を少しは泣いて貰いたや、田舎の客が身請の事今日も今日とて鳩屋にて、理窟を詰めて強請言腹が立やら憎いやら、とは言ひながら是は先、忠兵衛様は後手といひ宿の勢力一つにて、手附も渡し約束の日限切れるも言ひ延ばし、今日迄は繋がりしが忠様も世帯持、養子の母御の手前といひ屋敷方歴々の、町方を引受けて東路かけての大事の商賣、如何なる事が邪魔になり田舎の客に請けられては、我身一つは死んでものけふ天神太夫の身でもなし、さもしい金に気がふれた見世女郎の淺ましさと、世間の唱へ傍輩の掃部殿を始として、格子女郎衆の手前も有、忠様と本意を遂げ兎や角人に歌はれし、面が脱ぎたふござんす」と泣きしみ、づきて語るにぞ、一座の女郎身の上に、思ひ合て尤と連れて涙を流せしが「ア、いかふ氣がめいるわつさりと淨瑠璃にせまいか、禿共ちよつと往て竹本頼母様借つて來い、」いや先刻に髪附買ふとて聞きましたが、芝居から直に越後町の扇屋へ行かんしたげな、私は頼母様の弟子なれば能ふ似た

聞入に淨瑠璃語りである。其の家は大阪新町の大門口にあつて、饗附・香油などの化粧品を出してゐた。そして彼は竹木座に勤める暇には、揚屋・色茶屋に招かれて淨瑠璃を語つてゐたのである。

○いや先刻に：サア三味線 梅川の詞。

○越後町 新町遊廓内、佐渡島町筋に當る町名。

○夕霧 寛文・延寶頃に於ける名姓。京都島原から大阪に下つたのが十六歳の時であつたといふ。延寶六年正月六日病歿した。歳二十五。下寺町淨園寺に葬る。近松作三世相に、大阪新町九軒町屋の各姓夕霧が病歿した後、夕霧の妹女鹿萩野が夕霧の子春姫に逢ひ、夕霧を追懐して、遊女の戀物語をする事が見えてゐる。この文は、その昔の萩野の話した戀物語を、今の我が身(梅川)に引掛けて淨瑠璃で語るものである。「風塵」行かんしたとあるのも、夕霧のた屋敷の縁によつたものである。

○今に 今の我が身に。

○傾城に誠なし：つらや如在と恨むらん 近松作三世相「第三」に出てゐる文であつて、萩野の戀物語である。梅川がこの萩野の戀物語の淨瑠璃を、頼母の節で語るものである。

○彌猛に いやましに勇ますすみて。

○花の根引 花客に請出されること。

○重ねる色衣 「新古今集釋教部の歌、「さらぬたに重きが上のさよ衣、わがつまならぬつまな座ねそ」に本づいたものである。ただ戀をかさねる意でなく、誠ならぬ戀をかさねる、即ち邪淫の意にいうたものである。

所を聞かんせサア三味線」と夕霧の昔を今に引掛けて、傾城に誠なしと世の人の

申せ共、それは皆僻言譯知らずの詞そや、誠も嘘も本一つ、たとへば命抛ちい

かに誠を盡しても、男の方より便無く遠ざかる其時は心彌猛に思ひても、斯ふし

た身なれば儘ならず、自から思はぬ花の根引に逢い、かけし誓も嘘となる、又始

めより偽の勤めばかりに逢ふ人も絶へず重ねる色衣終の寄邊となる時は、始め

の嘘も皆誠兎角只戀路には偽も無く誠もなし、縁の有のが誠ぞや、逢ふ事叶は

ぬ男をば思ひく〜て思ひが積り、思ひ醒めにも醒むるもの辛やじよさいと恨むら

ん、恨まば恨めいといふ此病、勤めする身の持病か」と、戀に浮世を投首

の酒も、白けて醒めにけり、中の嶋の八右衛門九軒の方より淨瑠璃聞附「ヤア皆

聞知つた妓の聲々花車内にか」とつ、と入、柄差箒逆手に取り二階の下から板敷

○終の寄邊 「浪氏物語」帯木の巻に「樹まめやかに静かなる心の趣ならむよる、べをぞ終つひのたのみ所には思ひ置くべかりける」とあるに據つたもので、最終のたより所の意である。

○じよさい 如在であつて、ありのまま即ち存在(ぞんざい)の義。物事を疎略にする(こ)の意にいふ。この文は、熱情も度を過ぎれば却つてさめ易い。さうする(こ)先方では、我を疎んじたと恨むたらうとの意。

○投首 首を投げて愚弄すること。浮世を捨けるをいひかけて、梅川が身をなけうつ意をかきた。

○酒も 一塵の者が酒で上機嫌になつてゐるのも。

○九軒 新町遊廓内、瓢箪町の北隣筋の町名。もと揚屋九軒あつたよりかくいふ。

○花車 遊女屋の主婦をいふ。遊女を花に喩へて、花を廻す(まわ)る(こ)の意であらう。こは越後屋の女主人清をさす。

○柄差箒 長い柄を附けた箒。

○とこも。

○一人 男一人あいてゐる。自分のことをいふ。

○粹 推の略。粹は當字。義理人情ヲ推察して、氣轉をきかすこと。(既出)

○貰ふ 客に買はれてゐる遊女が、他の客の爲或は自分の都合などで、眼を取るをいふ。

○忠兵衛もまだ見えそもない 前文に、八右衛門が受取證の清書文に、「晩には酔で飲みかけ、我らは密問實正明白也、何時成共願の節きつと參上申べく候しとあるに應じる。

○耳打つて置く 内々知らせて置く。

○世を忍ぶ心の氷三百兩 夜行くのであるから世を忍ぶといふ。そしてこの三百兩の爲に心もふるへあがり、世を忍ばねばならぬ身となるをまかせた。その三百兩は我が金でないから、心身共に氷の如くひや／＼するを、「冷ゆる夜にいひかけ、そして雪國越後の縁から越後屋にいひかけた。

○横座 正面の上座。「俚言葉」に「横座は正面の事也、今田舎にてイロリの正面を横座と云。

○壁に耳 壁に耳が附いてゐるやら知れぬ義で、どこで何人が聞いてゐるやら知れぬこの意の語。この語を用ひて、梅川が壁に耳を附けて聞く意にいふ。

○居竦み 偶るに於ては神佛の冥罰を蒙つて、怒ち身動きもならず、居竦みとなるべしこの意であつて、自警の詞。

○十五貫目 金一兩に上銀五十六匁替として、上銀十五貫目は金二百六十八兩弱であり、上銀二十

を、ぐはたくと突鳴し、女郎衆あんまりじや爰にも人が聞てゐる、いか成男で
 それ程に戀しいぞ、男が無ふて淋しくはお氣には入らずと、是にも一人貸して遣
 ろか」と喚きける、梅川はそれ共知らず「デモ逢いたい定じやもの、憎いなら
 来て叩かんせ、清様下なは誰さんじや」、「イヤ大事ござんせぬ中の嶋の八様」と、
 聞きより梅川はつとして「是々彼のさんには逢いともない、皆様下りてくださんせ
 私か二階に居る事を、必らず「言ふまいぞ」、「そこらは粹じや」と打領き皆々
 座敷に出ければ、「ヤア千代歳様鳴戸瀬様、歴々の御參會、梅川殿は宵の口嶋屋を
 貰ふて往なれたげな、忠兵衛もまた見へそもない、花車爰へ寄らつしやれ、女郎
 衆も禿共も忠兵衛が事につき、耳打つて置事がある爰へ」とひそ／＼すれば、
 「ハア、何事やら氣遣な」といへ共二階の梅川に、悪い噂も聞かせんかと皆氣を
 配る折節に、忠兵衛は世を忍ぶ心の氷三百兩、身も懷も冷ゆる夜に越後屋に走
 り著き、内を覗けば八右衛門横座を占めて我評判、はつと驚き立聞す二階には梅
 川が、心を澄す壁に耳漏るゝぞ仇の始めなる、斯くと知らねば八右衛門「斯ふ言
 へば忠兵衛を憎み猜むやうなれど、居竦みぞあの男が身のなる果が可愛ひ、尤も

貫目は金三百五十七兩強である。

○身代 みのしろ。身上 財産。「身體」を賣いた本もあるが、これは借字。

○こす よこす。遣はず。

○五百目：踏まねばならぬ 五百目から一貫目位は遊興につかひもし、掃屋遊びもせねばならぬとの意。金一兩に上銀五十六匁替りして、上銀五百目は金九兩弱、上銀一貫目は十八兩弱に當る。

○嘘八百 嘘の極めて多きをいふ語。

○いかう 殿、いかじう。きつう。甚だしう。

○鎧が詰つて来た 刀の鎧尻の短いのに嘘へて、物事の窮迫して来た意にいふ。

○出る 脚を出る。身請されるをいふ。

○二百五十兩 ここでは何故に二百五十兩いるかわかりにくい、後文に忠兵衛が梅川を請出す爲に、殆んど二百五十兩をはらまく事が出でゐる。

○中で取つて遣ふ 人からこぼつた金を、こぼれずに、たまつて自分が取つて遣ふ。

○いとしばや 「いとしばしや」の轉倒語。茶金を「ちやまがしばしや」の類。

○せつかれて せりつけられて。督促されて。

○獄門の種 人の金をごまかして罪にまはれ、獄門へ晒すの利に處せられる其のこゝと。

○短氣は損氣 性急では事をそこなひ破つて、自分に損害を招く意の語。

○公界 世間。傾城は、世の中の種々な人々交はる意より公界者といふ。傾城の勤めを公界の勤めといふ。

千兩二千兩、人の金をことづかり暫しの宿を貸すけれ共、手金としては家屋敷家財かけて十五貫目、二十貫目に足らぬ身代、大和の親が長者でも、龜屋へ養子にこすからは高の知れた百姓斯ふいふ此八右衛門も若い者の習ひ、一年に五百目一貫目揚屋の座敷も踏まねばならぬ、身にも應せぬ忠兵衛が梅川に上り詰め、嶋屋の客と張合五月より此方大方は揚詰め、身請も此比極まり、百六十兩の内五十兩手附渡したげな、それ故に方々の届け金が不埒になり、當る所が嘘八百いかふ鎧が詰つて来た、今でも梅川がサア出るに極まらば、借錢も有ふし泣いても二百五十兩、天から降らふか地から湧かふか、盗みせふより外はない、彼の手附の五十兩何處から出たと思し召す、身が方へ来る江戸爲替中で取つて遣ふたを、それ共知らず乞ひに行養子の母御がいとしばや、上つたは知つてなり渡せくとせつかれて、忠兵衛が戻した小判お目に懸けふかと、一ト包取出し、「コレ斯ふ見た所は五十兩、さらば正體現はして獄門の種御覽あれ」と、包を切て切りほどけば焼物の鬘水入主も一座の女郎も「はあ、」とばかりに怖氣立ち、身を縮むれば二階には、顔を疊に摺附て聲を隠して泣き居たり、短氣は損氣の忠兵衛傾城は公界者、

○目腐金 物をしみをする人の僅少な所持金を罵つていふ。

○借上 高慢の意。(見索引)

○一分 面目の意。(既出)

○しやうげ鳥 「かくやしよう」を「しよげ鳥」にいひかく。惘然たる人を、しよんぼりした鳥に喩へてしよげ鳥といふ。近松作「大經師普請」に、「中に挟まるしよげ鳥の、涙人の菓のこりぶがやね。」

○騙の術 騙のくちほしは、くちひがつてゐる。以て物事のくちひがつて、意の如くならぬことにいふ。「騙物のしのは」の如くこの意。

○相場が安い 金の相場が安い。

○五十兩を二分五厘替 二この文によれば、銀十八文と銀二分五厘とは等しい。金一兩は銀四貫文替であるから、金一兩は銀五十六兩弱替であらねばならぬ。(金一兩は元禄銀、銀は元禄銀のことである)。

○巾著切 往來の人の巾著・財布などを切取る小盗人。すり。

○家尻切 家尻を切破つて闖入する強盜。

○首切 斬首の刑に處せられること。前文に「獄門の種御覽あれ」とあるに應じる。

○笑止 いたはしいこと。(既出)

○挨拶切る 應答を絶つ。親交する。男女の縁を絶つ。

○請けさせて 請出させて。

○片小鬘剃り毀され 首を刎ねるに、鬘髪が

五十兩の目腐金取替へた借上、若い者に恥か、せ川が聞たら死にたかろ、懐の三百兩五十兩引抜いて、面へ撲附け存分いひ我身の一分川が面目、濼いでやらふアされ共是は武士の金、殊に急用、が大事の堪忍と、手を懐へ幾度か兎やせん角やしやうげ鳥、騙の背の食違ふ心を知らぬぞ是非もなき、八右衛門水入取上、
 「これも買はば十八文、如何に相場が安いとて五十兩を二分五厘替、神武以來無
 いこと、友達さへ是なれば他人を騙るは御推量、此次は段々に巾著切から家尻切、
 果ては首切り如何にしても笑止な、あの如くに亂れては主親の勘當も、釋迦・達磨
 の意見でも聖徳太子が直に教化なされても、いッかなく直らぬ廓で此沙汰ばつ
 として、寄せ附ぬやうに頼みます、梅川殿へも吹込んで此方から挨拶切り、嶋屋
 の客にさらりつと請させて仕舞ひたい、皆彼の流が心中か女郎の衣裳を盗むか、
 ろくな事は出かさず片小鬘剃りこぼされ、大門口に曝され友達の一分棄てさする、
 人でなしとは彼が事、可愛くば寄せて下さるな」と語るを聞けば梅川も、悲しい
 といとしいと身のはかなさと掻交せて、胸引裂ける忍び泣き「ア、刃物がな缺で
 も、舌を切つても死にたい」と悶へ伏したる苦しみを、下には各推量して「ひ

邪魔になるにより、片髪さきを刺り落すのである。
○大門口 遊廓町の出入口に大門がある。新町には狐塚町跡の東西両端に大門口があつた。その大門口で頭首にあふのである。

○ひよん 凶な意にいふ。忌々(いまいましい)しいこと。よからぬ事。新井君美の船に、「俗に物の不好事を凡てひよんな事と云ふ、凶字の華音ひよん云ふよりいひ傳へて管語となれり。忠兵衛が人を騙(かたじ)るやうな悪い心になつたといふのである。

○肩 運の意。「籠耳(かごみみ)負(か)り四年成(なり)に」運の好い悪いといふべきを、肩が好い悪いといふべき詞にあらず、肩に掛(か)り商人(しやうじん)駕籠(かご)昇(のぼ)り乗物(のりもの)界(かい)より起(た)る詞なり。

○うち若き 若々しい。
○悪い蟲 糊(か)り持(も)ちの意。糊(か)り(こ)こを「糊(か)り蟲(むし)」といひ、又ふとした事で怒(お)るやうなことを「蟲(むし)の居(ゐ)所(ところ)が悪い」といふ。かやうに蟲(むし)といふことを種々(しゆしゆ)の意(い)に用(もち)ひる。

○男ぢや 上(かみ)之(の)卷(ま)に「丹波屋(たんばや)の八右衛門男(やえもん)ぢや」とあるに應(こた)へる。
○三人寄れば公界 三人寄れば世間(よこしま)であつて、公開(ひら)したことになるこの意(い)の諷(ふく)。

○湖卸 盆正月(ぼんしょうげつ)に、商家(かみや)で店(みせ)に陳列(ちんれい)してある商品(しやうひん)を取卸(と)して調査(さぎさ)する事(こと)。轉(ま)じて、人の弱點(じやくてん)までも悉(ことごと)く述べ立てること。
○忝(かたじ)け 忝(かたじ)けからぬを強く反語(はんご)にいうた。
○三界 界隈(かいがい)。あたり。三界(さんがい)は名詞(なご)と複合語(ふくご)となつて用(もち)ひる。江戸(えど)三界、京(きやう)三界、高津(たかつ)三界、藤(ふじ)三界、

よんな心にならんした肩の悪い梅川さま、いとしばいは川様お一人に止めた」と、下女料理人(したにようり)うら若(わ)き、禿(かぶ)も袖(そで)を絞(しぼ)りけり、忠兵衛元來(ちゆうべゑげんらい)悪い蟲(むし)押(お)しかねてずんと出(いで)、八右衛門(やえもん)が膝(ひざ)にむんずと居(ゐ)かゝり、是(こゝ)は丹波屋(たんばや)の八右衛門殿(やえもんどの)、常々(つねづね)の口程(くちぢやう)あつてヲ、男(お)じや見事(みごと)じや、三人(さんにん)寄(よ)れば公界(くがい)忠兵衛(ちゆうべゑ)が身代(みしろ)の棚卸(たなご)してくれぬ忝(かたじ)け、コリヤ此(こゝ)水入(みづいれ)も男(お)同士(どうし)、母(はは)の心を安(やす)める爲(ため)請取(うけと)つてくれるかと、謎(なぞ)をかけて渡し(わ)したを此(こゝ)忠兵衛(ちゆうべゑ)が五十兩(いそりやう)、損(そん)かけふかと氣遣(きづか)ひさに廓(くわらく)三界(さんがい)披露(ひろう)して、男(お)の一分(いちぶん)捨(す)てさする、但(たし)又(また)嶋屋(じまや)の客(きやく)に賄賂(まわい)取(と)りて、梅川(うめがは)に藁(わら)を焚(た)きあちらへ遣(や)らふといふ事(こと)か、措(そ)いてくれ氣遣(きづか)すな五十兩(いそりやう)や百兩(ももりやう)、友達(ともだち)に損(そん)かける忠兵衛(ちゆうべゑ)ではごあらぬア、八右衛門(やえもん)様(さま)八右衛門(やえもん)め、サア金渡(かねわた)す手形(てがた)戻(もど)せ」と、金取(かねと)出し包(つづみ)を解(と)かんとする所(ところ)を、八右衛門(やえもん)押(お)して「こりや待(ま)てやい忠兵衛(ちゆうべゑ)、よつほどのたはけを盡(つく)せ、其心(こゝろ)を知(し)つたる故意(こゝろ)見(けん)しても聞(き)くまじと、廓(くわらく)の衆(しゆ)を頼(たの)んで此方(こゝ)から避(よ)けて貰(もら)ふたらば、根性(こんじやう)も取直(と)りし人間(にやう)にもならふかと、男(お)づくの懇(ねん)だけ、五十兩(いそりやう)が惜(お)しければ母御(ははご)の

親許(おやごころ)三界(さんがい)、懷(いだ)食(く)屋(や)三界(さんがい)、他國(たこく)三界(さんがい)ならぬといふ。
○翠(すい)を焚(た)く 餅(もち)難(がた)なくせをつけて既(い)げなすをいふ。
『懷(いだ)言(ご)葉(え)』に、森(もり)を焚(た)く「むむ口(くち)をいふこと」、又古道具(いにしへのたぐい)を買(か)ふに色(いろ)を懸(か)しく言(い)つて直(ただ)むじぎるをいふ。道(みち)し難(がた)を焚(た)附(つ)ける頼(たの)より

して、おたてる意(い)にいひ、よつて又(また)『懷(いだ)言(ご)葉(え)』にいふが如(ごと)き意(い)の語(ご)になつたのであらう。
○と と思(おもう)ひ。
○男(お)盡(じん) 男(お)氣(き)を立てぬこと。

○ てんがう いたづら。じやうたん。(自索引)
○ 八右衛門が 八右衛門の心が。

○ 仕切銀 「しきりぎん」といふ。取引決算の掃蕩金。(自索引)

○ 八右衛門した様に 八右衛門にした様に。

○ 上り詰める 逆上しきる。のほせあがる。
「のほせ」はのほせる意。

○ 性根 もと正念(しやうねん)であらう。根性。

○ 仁義立て 道理を知つて、立て通す(にんぎ)。人の爲を思ひ親切立てをする(にんぎ)の意ではない。

○ つまらぬ五十兩 短氣をおこして、詰らぬ辯駁をして、詰らぬ身となるを、他人の金で詰らぬ五十兩にいひかく。

○ ぎしみあふ 軋言。それあふ。伊ひ合ふ。きしむ軋(ぎ)のきは濁つていふ。

○ 嶋八様 中の嶋八右衛門様の略。遊廓では略名などを以て呼び、本名を呼ばぬが例である。

○ 梅川に赦して 梅川が謝罪するのに對して、御存赦して。

○ 持丸長者 金満家。富家。

○ 此所の恥は恥ならず 近松作「女殺地獄」下之巻にも、「茶屋傾城屋の持は一年半運なほるも苦にならず」とある。

○ 牢櫃 籠籠(ろうびつ)とも書いてある。牢獄をいふ。牢屋(近松作「今宮の心中」に「籠籠に入る時、鑿屋の梁が阿房蓋し登人飼ひた」。

前で言ふはいやいや、てんがうな手形を書き無筆の母御を宥めしが、是でも八右衛門が屈かぬか、其金嵩も三百兩手金のあらふ様もなし、定めて何處ぞの仕切銀、其金に疵をつけ、八右衛門した様に髪水入では済むまいぞ、但代りに首違るか上り詰める其手間で、屈ける所へ屈けてしまへ、性根の据らぬ氣違者」と、割つ、砕いつ叱れども「いや〜仁義立て措ひてくれ、此金を餘所のは此忠兵衛が三百兩持つまいものか、女郎衆の前といひ身代を見立られ、猶返さねば一分立たぬ」と、包解いて十廿三十、始終つまらぬ五十兩くる〜と引つ包み、これ龜屋忠兵衛が人に損かけぬ證據、サア受取れ」と投附くる「男の面へ何とする、忝いと禮言ふて返し直せ」と投戻す、「己に何の禮言はふ」と、又投附けつ投返して腕まくりして軋み合ふ、梅川涙にくれながら梯子駈下り「なふすつきり私が聞きました、皆嶋八様のがお道理じやこれ手を合せる、梅川に赦して下さんせ」と聲を、上げて泣きけるが「情なや忠兵衛様なせ其様に上らんす、抑や廓へ来る人の假令持丸長者でも金に詰るは有ならひ、此所の恥は恥ならず何を當に人の金、封を切つて撒き散し詮議にあふて牢櫃の、繩かゝるといふ恥と此恥と替へらるか、

○思うたら 思ひまへすれば、あまはごうした
らよいか其の決心は。

○年 勤の年限。

○下宮嶋 安藝の宮島(殿島)は、大阪より下し
もなればかくいふ。

○仕切り 斂替して決算を済す意。

○濱に立ち 深瀬屋あたりを立ちさまよふ意、
辻君に身を落すすいふ。

○井手の山吹 「井手」は山城國綴喜郡井手町あ
たりをいひ、昔は山吹の名所である。「古今集」春下
部の歌に「かはづ鳴く井手の山吹散りにけり、花の
盛りにあはまほものな」。小判は山吹色なれば、小
判の上に涙のかかるのは、山吹に露のかかる如くで
あるこの意。

○有頂天 三界(欲界・色界・無色界)の最高所に
あり。以てのほりつめる事の意にいふ。

○前後括らぬ間に合ひ席 前後を拂はぬ間
「まじ」に合はせの下ための意に、間に合はせに繰つ
た席の縁の前後を括らぬ意をいひかけた。そしてや
がてほれる意をまかせた。

○敷金の事 前文に「四年以前に大和より敷銀
持つて養子か」と見えてゐる。

○花車 越後屋の女主人清をさす。(既出)

○買掛り 現金拂にしないで品物を買ふこと。
掛買。世間胸算用(卷二)「内誦の連も呼のあかざ
る人は買ひがかり、萬事一軒へも拂はぬ胸算用」。

○遣手 売や遊女の態をなし、且つ贗作し、又揚屋

恥かくばかりか梅川は何となれといふ事ぞ、篤と心を落しつけ八様に詫言し、金

を束ねて其主へ早ふ届けて下さんせ、私を人手に遣りともないそれは此身も同じ

事、身一つ捨てると思ふたら皆胸に籠めてゐる、年とともまあ二年下宮嶋へも身

を仕切り、大坂の濱に立ても此方様一人は養ふて、男に憂き目かけまい物氣を静

めて下さんせ、淺ましい氣にならんした斯ふは誰がした私がした、皆梅川が故な

れば忝いやらしいやらしいやら、心を推して下さんせ」と、口説き立々小判の上

にはらはらと涙は、井手の山吹に露置き、添ふが如くなり、忠兵衛氣も有頂天、

前後括らぬ間に合ひ席敷金の事思ひ出し、はて喧しい、此忠兵衛をそれ程たはけ

と思やるか、此金は氣遣ない八右衛門も知つてゐる、養子に来る時大和から、敷

金に持つて来て餘所へ預け置いた金、身請の爲に取戻した花車爰へ」と呼寄せ、

「先へ手附に五十兩、今百十兩合て百六十兩、是川が身の代是又四十五兩、何日ぞ

やべた帳面買が、りの借錢、五兩は遣手九月からの揚錢、萬事十五兩程と覺えた

が、算用がやかましい甘兩で帳消しや、此十兩は此方へ御祝儀やら骨折分、りん

で諸事取持ちをする女で、赤前垂をなし腰に鍵を吊してゐた。

○揚錢 遊女を呼寄せて侍らした代金。揚代。

○やかましい ごとくと面倒くさい。

○男ん玉・五兵衛 下女・下男の名。

○邯鄲の夢 邯鄲の地ともいふ。短き夢の間の榮華をいひ、塵生が邯鄲の旅客に於ける寶鑑一炊の夢の故事。

○主 越後屋の女主人清きよをさす。

○かは 「かわで」わじは威助の意を示す。かな。

○氣を死なさう 氣をくらさう。心をめいらさう。

○すまぬ顔 八右衛門は忠兵衛の言を聽たらうと疑ひ、さやうな事では済まぬ、何をしでかすかといふ顔附。納得できぬ顔附。

○是に これにゆるりなされませ。(私はおさきへ失禮します)。

○立ちに立つて急ぐ 急ぎ立てるを強めていふ。

○身請の衆は：隙が入りませう 身請の手續は、身請される遊女が抱主の承諾を済してから、町年寄によつて、遊女契約證文の判が取消されて契約が解除され、月行事から大門通許可の札を貰はねば、大門を出られませぬから、その手續を取つてゐるので、まちつと隙が入りませう。

○宿老 町年寄をいふ。町内の公用雜事を掌る役で、町内の若で徳望あり資産ある舊家の者が公選され、任期は多くは二年で、名譽職である。

○月行事 毎月次替で、町内の其の月の行事を掌る役。遊脚では種主かはるゝ之に當る。

○大門 遊脚町の出入口にある門。

○三里 灸穴の名。膝頭の下の外方の凹い處をい

も玉も五兵衛も壹兩づゝ、じや来い〜」と、金銀降らす邯鄲の夢の間の榮耀なり、
「サア今の間に埒明今宵の中に出る様に、頼む〜」と言ひければ主俄に勇みをなし、「無い程は無いも金有段には有物かは、氣を死なそふ事でない川様嬉しう思はんしよ、ヤ大事の金を持って行く、りんも玉も供しや」と引連れ走り出にけり、
八右衛門はすまぬ顔誠とは思はね共、たゞさへ貰ふ此小判返す物をいはれぬ辭儀、「五十兩慥に請取た手形返す」と投出し、梅川殿よい男持てお仕合、妓様達是に」と金懐中し出ければ、「私らもいざ歸りましよ、川様目出度ふござんす」と皆宿宿へぞ歸りける、忠兵衛氣を急いで「花車はなせ遅いぞ、五兵衛行つて急つてくれ」と立に立て急ぎけれ共、「イヤ身請の衆は親方が済んでから、宿老殿で判を消し、月行事から札取らねば大門が出られませぬ、まちつと隙が入ませぬ」、「エ、そこらを早ふこりや頼む」と、又一兩投出す「おつとまかせ」と足軽く、走る三里の灸よりも小判の利ぞこたへける、「サア〜此間に身拵へへたべたした取なり、帯もきり〜と仕直しや」とめつたに急げば「何ぞいの、一代の外聞傍輩衆へも杯事、暇乞も譯好ふしてゆるりと出して下さんせ」と、何心なく勇む顔男はわ

ふ。三里の歩は足を輕うする效驗があるが、それよりも小判の方が、氣經にするになほよく利くといふのである。

○べた／＼した取なり　でれ／＼と媚かしい着衣のしこなし。

○何ぞいの　何をいれませんが。輕く問ひかける口吻を寫したものの。

○たも　たまはれ。くれよ。

○地獄の上の一足飛び　危い處にいふ語。「義経後覺」に「深淵に臨んで薄氷を踏む」とあるが、あぶなき事の譬に引きけるが、これこそ地獄の上の一足飛びなれば」とあるから、戦國時代既にあつた語である。

○厭な物　獄門首(さらしくび)をさす。忠兵衛が蕨屋敷へ届けるべき爲替金三百兩を盗み取つた利は、鼻首に處せられるものであるを暗示した。

つと泣き出し、「いとしや何も知らずか今の小判は堂嶋の、お屋敷の急用金此金を散しては、身の大事は知れた事随分こらへて見つれども、友女郎の眞中で可愛ひ男が恥辱を取り、其方の心の無念さを晴したいと思ふより、ふつと金に手をかけてもふ引れぬは男の役、斯ふなる因果と思ふてたも、八右衛門が面附直に母にぬかす顔、十八軒の仲間から詮議に來るは今の事、地獄の上の一足飛び、飛んでたもや」とばかりにて纏り、附いて泣きければ、梅川はあと顔ひ出し聲も涙にわなわなど、「それ見さんせ常々言ひしは爰の事、なせ命が惜しいぞ二人死ぬれば本望、今とても易い事分別据へて下んせなふ」、「ヤレ命生きやふと思ふて此大事がなる物か、生きらるゝたけ添はるゝたけ高は死ぬると覺悟しや」、「ア、そふじや生きるゝたけ此世で添はふ、今にも人が來る爲爰へ隠れてござんせ」と、屏風の陰に押入、「ア、妾が大事の守を、内の箆筒に置いて來た是がほしい」と言ひければ、「ハテかゝる悪事を仕出して、如何な守の力にも此科が遁れふか、兎角死身と合點して我は其方の回向せん、其方は此忠兵衛が回向を頼む」と屏風の上、顔を出せば、「ハア、悲しや忌々しい、ちやつと措いて下さんせ厭な物に能ふ似た」と、

○越後主従 越後屋の女主人清きよ及びその下女しもめりん・玉たま下男しもをとこ五兵衛ごべゑをさす。

○西口 西の大門口をいふ。佐渡屋町越後屋は西口に近い。

○札 大門通過許可の札をいふ。前文に「月行事から札取らねば大門が出られませぬ」とある。

○千日 現今大阪の千日前あたりは東京の淺草のやうな所で、劇場興行物などの最も盛んな所である。この地昔は刑場のあつた所で、千日寺の鐘の音陰謀を極めたものである。忠兵衛は、千日刑場の露つゆと清きよえることを豫想して、「迷惑めいわくをうたうた。

○木綿附鳥 鶏けいの異名。顕照の説に、世の中に騒動ある時、鶏に木綿四手を附けて、京の四境の關に放つたによつての稱であるといふ。この文は、鶏を告げ西の大門の開くを待つて、別れを告げ出で行く意。

下之卷 (道村の場)

登場人物の主な者

忠兵衛ちゆうべゑ (淡路町飛脚業龜屋の養子) 孫右衛門の子。二十四歳

垂井端たゐりはなの助三郎すけさぶろう (忠兵衛が郷里の知人)

梅傳うめでん

が

川かは (植屋の抱妓。忠兵衛に請出さる) 里の知人

忠三郎ちゆうさぶろうの妻 敏懸とみかけの藤次兵衛とうじべゑ (忠兵衛が郷里の知人)

屏風びやうぶにひしと抱いだき附つき咽返むせがへ、りてぞ歎なげきける、越後主従しうごくちゆう立返たちかへり「サア何處どこもかも埒明らちあいた、お出での勝手かたて近ちかければ西口にしぐちへ札あだが廻まはつた」と、言へども夫婦ふうふはわな／＼と「さらば／＼」も顛かぶひ聲こゑ、「お寒さむそふなが酒さけはいの」、「酒さけも咽のどを通とほりませぬ」、「目出度めでたいと申まうそふかお名残なごり惜おしいと申まうそふか、千日ちじついふても盡つきぬ事こと」、「其千日そのちじつが迷惑めいわく」と、木綿附鳥かづはどりに別わかれ行ゆく榮耀えいよう榮華えいげも人の金かね、果はては砂場すなはを打過うちすぎて、跡あとは野のとなれ大和路やまとぢや足あしに、任まかせて

○砂場 新町遊廓西の大門口の南で、越後町の西端にある。この文は、「人の金を果は砂にする」をいひかく。砂にするとは、只ただうはにする意。

○三重 この文は、「足に任せて落ち行く」なごいふべきを略したのである。(既出)

道

庵(鍼醫者)

勝木孫右衛門(新口村の百姓)

忠三

郎(忠兵衛の友)

櫻 概

忠兵衛と梅川とは、今までは越後屋を宿として折々逢ふ夜を楽しんだが、それも今は懐しい思ひ出の種となつた。彼等は犯した罪の恐しさに身ぶるひし、晝間は隠れて夜を待ち、相合駕籠に乗つて人目を忍びつつ行く。河堀口を過ぎて夜が明けると、ここで駕籠を下り、梅川は綿帽子を被て姿を變へ、忠兵衛と共に徒路をひろふ。道すがら庚申堂・勝鬘院を伏拜み、平野を過ぎ、藤井寺・譽田八幡を望んで合掌し、富田林を経て、竹内峠・岩屋越にさしかかる。

大阪の飛脚問屋十七軒の者どもは、忠兵衛が落ち行く先は、必ず彼の親里大和の新口村であらうと察し、捕吏と共に商人。古著買などに變装して入込み、警戒嚴重を極めた。斯くと知つた忠兵衛は、奈良の旅籠屋・三輪の茶屋等に二十日餘りの夜を明かし、四十兩を遣ひ果して、懐淋しうなつて新口村に來り、人目を忍んで、幼友達忠三郎の家に立寄り。忠三郎の妻出でて挨拶し、忠三郎を呼びに出る。

折から忠兵衛は、降出した時雨の音を聞き、窓を細目に明けて外面を望めば、田圃道を行く寺參りの里人の中に、垂井端の助三郎、荷物箱の傳が婆、鉞懸の藤次兵衛等が居る。「あれ等は知つた人だ」と指さして、梅川にそれらの人々の昔語りをして聞かせる。やがて親孫右衛門の姿も見えて來る。「あれく、あれへ見えるのが親爺様」と、涙にくれて手を合はす。梅川「そんなら彼のお方が、私の舅でござんすか」と懐かしがる。

孫右衛門は物案じして行く道の、張詰めた氷に足を踏み滑らし、足駄の鼻緒が切れて溝の中に倒れた。忠兵衛は之を見てもがく。梅川は慌てて走り出で、孫右衛門を抱起して懇に介抱し、懐中の延紙を取出して、足駄の鼻緒をたてようとする。孫右衛門は深謝しながら、不思議さうに眺め、梅川の言葉のはし／＼を聞きとがめて、この女が我が子の思ひ人であることを悟り、忠兵衛が大金を盗んで逃げた爲、この在所に非常線が張られてゐる事を語つて、罪の子に對する悲痛な親心を述べて泣き入つた。



飛脚大和往來 (安政元年八月申村座) 三世豊國畫
 忠兵衛片岡我 (孫兵衛坂彦郎) 梅川岩井三郎 (忠兵衛片岡我)

やがて巾着から、銀一枚を取出して梅川に與へ、「これは只今お世話になつた禮でござる。これを路錢にして、片時も早く連合と共に此處を遁れ、御所街道へかかつて立退かつしやれ。どうぞ無事でゐて呉れるやうに」と諭し、斷腸の念にくれて別れる。

忠三郎は色を變へて駈戻り、「これ忠兵衛様、今親御に逢つて様子を聞き、飛んで歸つた。捕手衆の搜索が急であるから、一足も早う此處を逃げさつしやれ」と、忠兵衛夫婦に古簀・古編笠を被せて、行方を晦ませた。それと入違ひに捕吏等は、忠三郎の家にどやくと入り來て、隈なく搜索し、「ここにも居らぬ。野路を搜せ」と、出て行つた。

孫右衛門は跣足で忠三郎の家に駈附け、我が子と梅川とが、無事に遁れたと聞いて胸を撫下し、忠三郎と共に寺に禮參りを志して出た。其の途中で、忠兵衛夫婦が捕吏に縛られてゐるのを見、氣絶せんばかりとなる。忠兵衛は親のこの様を見かね、目隠しを請うて、梅川と共に引かれて行く。

評

この巻も亦情と景と相映發して、しみじみとした物悲しい妙文である。近松の愛の筆が、罪の子に對してまでも及んでゐる事は、其の親の言葉の中に現はれて、恩愛の極致を盡してゐる。たとへ不孝な子でも之を讀む時、きつと親の恩に泣かされるであらう。

又濃艶な梅川の優しい心は、現在には容易く見難いものであらう。之はひとり梅川ばかりでなく、近松の世話物に出る主な女性性の總てが共有してゐるものである。

近松は、好んで遊里や遊女や遊蕩兒を描いても、それは彼によつて詩化された夢の外形である。されば讀者は、それ等によつて誘惑されるものでもなく、挑撥されるものでもない。其の頭腦に残るものは、近松が把持する、儼然たる道德觀の上に立つ不易の人情と、情緒儻かな妙文とであらう。そして我が國民性の美しい姿を、彼の藝術の中に見出し、其の刺戟を受けて自ら燃えるであらう。それは一時的のものにもせよ、そこに現實生活から夢にも得られぬ歡喜を享けて、詩人となり得ると共に、情操の向上に資する所があると信ずる。

○翠帳紅閨：世を頼み 謡曲「遊女」及び「稻荷塚四つ門」に據つた文である。

○翠帳紅閨 翠（みどり）の帳（と）はりを掛け、紅（べに）のしとねを敷いた美麗な間（ま）をいふ。

○四つ門 夜の四つ時（亥の上刻、今の午後十時頃）、遊蕩（うたが）を打廻（うたが）る限（かぎり）の太鼓を合圖（あひづ）に、廓（くわく）の大門（だいもん）を開閉（かいへい）するをいふ。

○世 世情（よこころ）。男女（おとこ）のなからひ。情交（じやう）。

○この文意は、美しい間房（まぼう）にいつも敷を馴（な）れた紅の表（うら）を敷き、枕（まくら）を並べて夜（よ）すから眠（ね）り、限（かぎり）の太鼓（たいこ）を聞いて別（わか）れ大門（だいもん）を出（で）た事（こと）も、今（いま）では夢（ゆめ）にも見（み）られず。それ（それ）につけても我が夫（おとこ）が、秋（あき）にならぬ中（なか）に必（かな）らず逢（あ）はうと、言（い）うたかため情交（じやう）を頼（たの）みさいふのである。

○中戸 店庭（たんでい）から中庭（ちゆうてい）に入る戸口（こ）をいふ。遊女（うでよ）が情天（じやうてん）、こゝで密會（ひそかひ）する事（こと）が多いので、その密會（ひそかひ）の

忠兵衛 相合駕籠
梅川 相合駕籠

下之卷

翠帳紅閨に、枕並べし閨の内、馴れし衾の夜すがらも、四つ門の跡夢もなし、さるにても我夫の、秋より先に必らずと、徒し、情の世を頼み、人を頼みの綱切れて、夜半の中戸も引替へて、人目の關に堰かれ行昨日の儘の髪附きや、「髪の毛のほつれたを、縮げて進じよ」と櫛を取、手さへ涙に凍えつき冷えたる、足

○人目の關に堰かれ行く 罪を犯した忠兵衛と梅川と

○縮げて 人が、人目（ひとめ）にからぬやうに人（ひと）を避（よ）け、逃（に）げて行く。

ふ。

○比翼煙管 雁首を一つにして、吸口を二つにした煙管があつたによつて、それをいふのであらう。以て相思の兩人が、互に吸ひ合ふ煙管の意。

○霧 仁兵衛版八乃至九行本には「きへ」とある。○賤 農天をさす。

○火を貰ふ 比翼煙管の火を貰つて、野守も喫煙する。

○野守 野を見まはりする農天。賤も野守も同人である。

○駕籠立てさせて 駕籠を立留らせて。昇いてゐる駕籠をおろさせるのである。

○價の露も命 十行本に「價の露の命」とある。駕籠賃の小玉銀に、露命をいひかけた。「露」とは小玉銀・豆銀をいふ。近松作「謎の權三重帷子」に「二腰の其二腰は、道芝の露の價と消果てて」。この文は、駕籠賃も吞まねば、また露命まで惜くないとの意。

○縮帽子 真綿を縮みひろけて作り、年増の女、老婆の被つたもの。後世には婚禮に新婦が顔を掩ふに用ひる。

○びらり帽子 紫縮緬で作り、左右に弄れた帽子で、びらりと縮むが故にかくいふ。もと歐舞伎殺者の被る帽子であつたが、おもに町人の婦女が被るものとなつた。

○色 戀の紫をゆかりの色といへば、この「色」もゆかりの意をふくむ。

○親身 眞實。

ん、肌これをと風防ぐびらり帽子の紫や、色で逢ひしは早昔、今日は親身の女夫合ひ、頼まば願ひ庚申、庚申堂よと伏拜み、振返り見る、勝鬘の愛染、様に愛敬を、祈る芝居の子供衆や、道頓堀の色々や馴れし廓のそれとは、紋で覺し提灯の中にはかなや榎屋内、「此木瓜に打添ひて私が紋の松皮の、松の千歳を祈りしに、定めぬ契り提灯の消ゆる、命の夕べには此紋附けて我中の、經帷子と觀念し、冥途の道を此様に手を引かふぞや」「引かれふ」と、又取交はし泣く涙袖の氷と閉ぢ合へり、誰が關据へぬ道なれど問ひく行けば抄行かず、今朝の姿をそのなりに素足に雪駄凍みづけば、空に雲の一曇り霞、交りに吹く木の葉ひらり、

○庚申堂 大阪四天王寺南大門の南にある。この文は、願叶へを「かえさる」にひひかけ、「かえさる」は庚申であるから、それを「庚申堂」にひひつづけた。

○勝鬘 大阪四天王寺西門の西北にある勝鬘院をいひ、本尊は愛染明王である。當時遊女・俳優などの愛敬あまなひの者衆が最も信仰した佛様である。

○色々 道頓堀の俳優・芝居子などが、勝鬘院に奉納した繪馬や提灯などの色々の物をいふ。

○榎屋 梅川の抱へ主の屋號。

○木瓜 室ぐわの紋をいふ。忠兵衛の紋所。上之巻に「酒も三つ四つ五つ所紋羽二重」あり、また「金帳中に羽織の紺結ぶ」とある。即ち忠兵衛が木瓜の五つ所紋の紋羽二重の羽織を着て

めるのである。「此木瓜の」「此は、忠兵衛の著てゐる羽織をさしていつたのである。

○松皮 松皮菱。この文は、勝鬘院に梅川が奉納した提灯に、「榎屋内」と書いて松皮菱の紋を入れたのが見えることをいひ、そして今著てゐる著物の紋も見皮菱であるをいふ。

○松の千歳を祈りしに 「松皮」から、松につづけた。千歳の壽を保つ松の如く、我が身の長久を祈つたに。

○我が中 我が相思の二人中「ふたりなか」。

○經帷子 佛葬にて、死者に著せる淨衣。白麻などで作り、南無阿彌陀佛或は題目などを書いたもの。



○平野 今大阪市住吉區内。「ひらり平野」は、同じ類語によつた所謂類語法。

○すぢりもぢりて 彼方此方へ歩き廻つて。「すぢる」も「ぢる」も共に、よぢる、曲りくねる、なぢるの意。

○藤井寺 河内國南河内郡藤井寺町剛健寺をいふ。眞言宗御堂派で、西國三十三所第五番の靈場、本尊は千手觀音である。この文は、曲りくねつて行くを、すぢりもぢりの藤葛にいひかけて、「藤井寺」につづけた。

○背戸 裏口。

○十七八が 十七八の娘が。

○門に立つたは：這入らしやんせえ「松の葉」(元祿十六年刊)卷一、端手紙の歌に、「門に立ちたは八もじ様か、夜風身の毒うちぢせとあつて、歌に八もじ様か」とあるので、「十七八が」といふて、この歌に據つた。

○朝込 朝込入る義で、戦に用ひる語なるを、遊廓に朝込入る事に轉用された語。遊治廓が未明から遊里に出懸け、大門の開くを待つて入り、朝込の遊女の部屋から歸るを局に待つて、暫時の間會合するごと。

○染めて 戀に身を染込みて。忠兵衛故に、梅川が戀に染まつてしまつた意。

○元の白地を：譽田 今更、元の戀に染まらぬ白地の心になりやうもないから、同じ染まるなら淺い戀に染まるよりも、いつそのこゝろ淺い戀に染まらうとの意であつて、淺いを譽田にいひかけた。

平野ひらのに行きゆかゝり、此處こゝは知る人、多おほければ、此方こちへ〜と袖そで覆おほひ、里さとの裏道うらみちをすぢりもぢりて藤井寺ふじのいで、あれ〜あれを見や、何處どこの田舎あなも戀こひの世や、背戸せうに菜なを摘つむ十七八が、一門いっもんに立たつたは忍しのびの夫つまかゝる、野風のかせ身の毒どく此方こち這入はいらしやんせえ、餘所よその睦言むつご、妬ねたましく、それ覺おぼえてかいつの事、彼の初雪はつゆきの朝込あさごに、寢ね衣まきながらに送おくられし大門おほいもん口の薄雪うすゆきも、今降かる雪も變かはらねど變ふり果はてたる身の行方ゆくあ、我故染われなめて、いとほしや元の白地しろぢを淺黄あさぎより、戀こひは譽田こんだの八幡はちまんに起請誓詞おこせがらみの筆ふでの罰ばち、そなたをよけて〜と泣なく涙暫なみだし、人目ひとめの、ヤ赦ゆるしはあれと、申まう是これなふさりとては、妾めかけが身みとてもまゝには〜と末すえは涙なみだに果はてしなく延のびの、三さんつ折をり絞しぼるにも裾すそにやつる、小笹原こささげ、霜しもに枯野かれのの薄原うすきはら茫ぼう、さ〜と鳴なつたは我われを追手おつての尋たずぬるよ〜と、覆おほひ重かさなり影かげ隠かくしふりさけ見みれば人ひとにはあらで、妻戀つまこひ鳥どりの羽音はねに怖おそぢる身みと成なるは、如何いかなる罪つみの報むくひぞ〜と、口説くちごとき歎なげきて、行ゆく姿すがた泣なくか笑わらふか富田林とみだのの群鳥むらからず、せめて一夜ひとよの心こゝろなく、咎とがむる聲こゑの高間山たかまやまあの葛城かづらきの神かみならで晝ひるの通かよひ路ぢ慎つつしましく、身みを忍しのぶ道戀みちこひの道みち、我われ、から狭せばき浮世うきよの道竹みちたけの内岬袖うちさそで濡ぬれて、岩屋越いはやこへとて石道いしみちや野越のこへ山やまくれ里々さと越こへて行ゆくは戀こひのへ

三重

○響田こんた 南河内郡古市町大字響田にあつて、應神天皇並に六神を祀る有名な神社である。

○起請誓詞の筆の調 神佛に誓つた證書に違背した罰。「起請」は、事を發起して神佛の照覽を請願する意。起請の證書を起請文といふ。

○よけて 罰がよけて償らぬやうに。

○暫し人目のヤ赦しはあれと 遂には遣れ得ぬ身なれども、暫し人目に見附けられぬやうに、赦しはあつてほしいと。この下に「心に念する」といふ意を略した。

○延 延紙の路。「延の三折」は、前文に註した。

○ふりさけ見れば ずつと遠方を仰ぎ見れば。「ふり」は披頭語。「さけ」は放又は離の義。

○妻戀鳥 雉子をいふ。「萬葉集 春の部、雜歌に「春の野にあさるまぎすの妻戀に、己があたりを人に知れつ」。近松作「松風村雨東帯鑑 第三」に「妻戀ひ雉子音をなきて」。

○泣くか笑ふか 群鳥の鳴くは、我が姿を見て同情を寄せて泣くのか、或は馬鹿な奴と笑ふのか。

○富田林 南河内郡富田林町。

○一夜の心なく 彼等二人の逃げ行くこの一夜は、見放してやらうとの心なく。

○高間山 大和國南葛城郡葛城村高天の山をいひ、金剛山の東方。ここの文は聲の高いにひかく。

○葛城の神 葛城の言主神をいふ。久米の仙人が岩橋を作る時、葛城の神は其の容貌の醜きを恥ぢ、晝は隠れ、夜のみ出て工事を従はれたといふ。

清める世の、掟正しく、畿内近國に追手か、り中にも大和は生國とて、十七軒の飛脚問屋或は順禮古手買、節季候に化けて家々を覗きの機關飴賣と、子供に飴を甜らせて口をむしるや畏の鳥、網代の魚の如くにて遁れがたなき命なり、無慚やな忠兵衛我さへ憂世忍ぶ身に、梅川が風俗の人の目立つを包みかね、借駕籠に日を送り奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明かし二十日餘りに四十兩、使ひ果して二歩残る鐘も霞むや初瀬山、餘所に見棄て、親里の新口村に著けるが、

「通ひ路」といふも、岩橋の故事に據つた語である。

○我から狭き浮世の道 罪を作つて我から世を狭くし、人目をさけて道をたゞる。

○竹内峠 南河内郡駒谷村大字飛鳥から一上山の南を越えて、北葛城郡高田に出る山路。「たう伊」峠は手前の音便で、山路を登り果てた所なるにある道祖神に、手向をする意から轉じて、坂路のこゝにいふ。

○岩屋越 南河内郡山田村から、大和國常盤寺と出る山路に當る。「河内名所記 卷三」に「岩屋峠、大岩屋有」。

○山くれ 小石の多い山路の意であらう。「くれ」は塊で、石塊をいふ。

○十七軒 上之巻に「十八軒」とあつて、ここに「十七軒」とあるは、龜屋を除いた數である。

○古手買 古着「ふるぎ」買。

○節季候 歳末の頃、齒染の葉を挿した笠を披り、赤布で面を覆うて目のあたりだけを露はし、二人乃至四人連立つて人の家

の庭に入り來て、唄を誦ひ踊つて米錢を乞うたもので、門附の一種である。

○覗の機關 鳥眼鏡をいふ。匣の中に種々な莖を入れ、その莖が轉換する裝置をなし、前方に設けた眼鏡から覗き見ますもの。ここの文は「家々を覗き」に風機關をいひかけた。

○飴を甜らせて口をむしる 甘言を以て誘ひ、子供の口から手がかりを言はずやうにする。

○無慚 罪を作つて心に慚ぢる所なき義。轉じて不便の意にいふ。

○三輪 大和國磯城郡三輪町。

○鐘も霞むや初瀬山 大和國磯城郡初瀬なる長谷寺の鐘の音が、かすんで聞える意に、金も手から遠ざかつた意をいひかく。

○新口村 (既出)

○師走 極月。十二月。
 ○勸進 佛道に關した事につき、俗人をすすめて寄附を乞ふ僧侶の輩。捕吏が種々に難儀して忠兵衛をさがすのである。

○下作あてた 小作をあてがつた。親方孫右衛門が、子分忠三郎に田地をあてがつて作らせた意。
 ○腹の中から 腹心から。「腹の中から馴染」は、腹心の親しい仲の意。

○おか様 人の妻をいふ敬稱。「好色一代男」卷六に、「人のおかさま並に被衣を着せて出かけ」。
 ○どれ どれ。たれ。誰。

○ばし 語勢を強める接尾語。(見索引)
 ○けいせん 「けいせい」(傾城)の訛。安原貞室撰かた言(慶安三年刊)に「傾城けいせい」をけいせん。

○舊里を切り 勸業義絶するをいふ。「公事方書留」に「久離之文字、公裁録には久離五よし認有之可執事、奉行所にては舊難通用致し候」。
 ○これ 自分の大忠三郎をさす。

○印判の 印判のこ。
 ○煮返る 佛立つ義。蘇ぎ立てる。「分里馳行脚」四之卷に「八兵衛ごの猫またが出をつたに、えかへる」。
 ○うたて いまほし。

「是お梅、爰は我生れ在所二十まで育つて覚えしが、師走の果に此如く、諸勸進諸商人春とても無いこと、あれ彼處にも立つてゐる野外れにも二三三人、胸騒ぎもして来た四五町行けば本の親、孫右衛門の家なれ共不通といひ繼母なり、此裏蒼は忠三郎とて下作あてた小百姓、腹の中から馴染み頼もしい男先此處へ」と打連れ、忠三郎殿宿にか、久しうお目に懸らぬ」と、つゝと入ば嘆と思しく「誰でござるぞ、これは今朝から庄屋殿へ詰められ、今は留守でござる」といふ、ム、忠三殿におか様は無かつたが、此方はどれでばしござるぞ、「ア、私も三年あとにこれの内へ嫁入して、前方の知る人はどれがどふも知りませぬ、ヤアほんに皆様は若し大坂ではござらぬか、これの親方孫右衛門様の繼子忠兵衛殿と申が、大坂へ養子に行て傾城買ふて人の金を盗み、其傾城連れて走られたといふて、代官殿より御詮議孫右衛門様は疾ふに親子の舊里を切、構はぬとは言ひながら眞實の親子なれば、年よつての氣苦勞これのは馴染の事なれば、若し此邊狼狽へて、見附られてはいとしい事と内外へ氣を附けらるゝ、庄屋殿から呼びに来る寄合の印判の、節季師走に此在所は傾城事で煮返る、なふうたてのお傾城殿や」と遠慮もな

○年籠りに參宮 年末から出かけて、元日に伊勢大神宮に參詣すること。

○鎌田村 大和國北葛城郡五位堂村鎌田。

○道場 聞法、修道の聖場の意。寺院をいふ。こゝは真宗の寺院である。

○京のお寺 京都東本願寺の僧である。

○讚歎 佛菩薩の功德を述べて稱揚する法話。説教の意にいふ。

○先 出先。

○いざ汁の下 「いさ(副詞)知らずを、いざ(感動詞)汁の下」にいひかく。

○櫛子 れんじ 漣子とも書く。富格子。

くぞ語りける 忠兵衛はつと思ひ「如何にもく大坂でも其取沙汰、我等は夫婦
連れで年籠りに參宮の志、懐しさに寄りましたちよつと呼んで来て下され、立ちな
がら逢ふて歸りたい、大坂者と言はずに頼みます」と言ひければ「扱はいかふお
急ぎか行て呼んで来ませふさりながら、鎌田村のお道場へ京のお寺のお下り、毎
日のお讚歎先から直にお道場へ、參られたもいざ汁の下、さしくべて下され」と
禰がけして走り行く、跡の門口梅川がはたと鎖して懸金かけ「是はほんの敵の中
大事ないか」と言ひければ「忠三郎といふ者は百姓に稀な男氣を持つたもの、
頼んで一夜逗留し死ぬる共此處、故郷の土に身をなして生みの母の墓所、一所に
埋まれ嫁姑の未來の對面させたい」と、目もうろくとなりければ「それは寤
しうござんせふ、さりながら私が母は京の六條、定めし此間詮議に人が行きつら
ん、日比が眩暈持なれば如何ならんした事やら、ま一度京の母様にも一目逢ふて
死にたいぞ」と、「道理とも我も其方のおふくろに、聲じやと言ふて逢ひたい」と
と、人目なければ抱き合ひ涙の、雨の横時雨袖に、餘りて窓を打つ「ハア、降つ
て来たそふな」と西受けの竹櫛子、反古障子を細目に明けて見やる野風の島道、

○阿彌陀笠 笠を阿彌陀後(かづ)きにする。笠を仰向けに披(ひ)くこと。

○垂井 泉のある所によつた名であらう。

○口利 類役。

○荷物瘤 荷を擔ふ人の肩にできてゐる瘤。

○剃下げ 頭の頂の髪を剃下(ひ)けて、兩鬢を細く狭く残した男子の結髪。絲髻。

○島原 島原遊廓。

○大盡 傾城買の上客。(見索引)

○請ける 身請する。

○鉋懸 鉋懸の枡をいふ。八十八の年祝ひに斗枡「ますかき」(枡に懸類を盛つて、これを枡の縁なみに手らにするに用ひる樽)を切つて、懸懸な人に分つた。蓋し好運な人の切つた斗枡を用ひれば、壽福を得るといふ。これは、こぼれ幸ひの懸に取なしたものである。(この文は、この慣習を應用して、「鉋懸」と渾名のやうにいひなして、「八十八で一升」といひつづけた。

○母者人 も「母ぢや人」である。母にてある人の母。

○緞 麻絲で目を粗く織つた布。

○肩衣 衣の上に着て、肩から背のみ被ひ、前は袷ばかりで袖がない。下に半袴を着けたのを、上下(肩衣半袴)合はせて上下(かみしも)といふ。娯遊笑談に巻二上、一向宗門徒は肩衣を着る風習があつた事が見えてゐる。

○今生のお暇 この世のお別れ。死別をいふ。

後しぶきに降る雨は擔(か)けて急ぐ阿彌陀笠、道場参り打連れしは「あれ皆在所の知

つた衆、先なは垂井端の助三郎是も在所の口利、あのお婆は荷物瘤の傳(つ)が婆、ア

アいかい茶飲(ちや)がの其所へ見へる剃下げは、昔は大貧乏、年貢に詰つて娘を京

の嶋原へ賣り、大盡に請出され奥様に備はり、髻の蔭(かげ)で田も五町倉も二ヶ所に分

限者、同じ傾城請る身が我は其方のおふくろに、憂目をかける口惜しい、あの爺

は鉋懸の藤次兵衛、八十八で一升の飯残さぬ、今年は丁度九十五、其處へ來た坊

主は鍼立の道庵、彼奴が鍼で母者人を立て殺した、思へば母の敵(かたき)や」と憂きに

つけての怨み言「あれ〜あれへ見へるが親父様」、「あの緞の肩衣が孫右衛門様

か、ほんに目元(めもと)が似たはいの」、「それ程能ふ似た親と子の、詞をも交はされぬ是

も親の御罰ぞや、お年も寄る足許も弱つた、今生のお暇」と手を合すれば梅川は、

「見初めの見納め私は嫁でござんする、夫婦は今をも知らぬ命百年の御壽命(ごじゆまひ)過て

後、未來で目に懸りましょ」と口の内にて獨り言、諸共に手を合せ咽び、入て

ぞ歎(なげ)きける、孫右衛門は老足の休み〜門を過野口の溝の水凍り滑るを止まる高

足駄、鼻緒は切れて横さまに泥田へがはと倒(た)げ込んだり、「ハア悲しや」と忠兵衛

○すけて 結びつけて。蓋し著「つけて」の釋であらう。富策集「著」の字が用ひてある。

○上臈「女房官品」に、上臈の局とあつて、御座殿・向侍及び二位三位の典侍で、禁色を懸された大臣の女、或は孫女等をいうたものである。以て身分の貴い婦人の稱にいふ。こゝは、しなやかな梅川を費んでいうた。

○邪見 邪険の意にいふ。無慈悲の「後生願ひ」に應じる。

○延 延紙の略(既出)

○つれづれ づら(熱)。つくづく。

○胸づはらしく 胸詰るやうにて。胸おしせまるやうに。「今様二十四孝」(寶永六年刊)卷之五に「今宵より物思し給ふを、見ぬ内にむなづはらしくなりて」。

○としばい としは(年延)の略とししやう。ねんばい。

○宮仕 宮中に奉仕することをいひ、轉じて、尊き人の家に仕へることを奉公。

腕けども騒げども、身を顧みて出もやらず梅川慌て走り出、抱起して裾絞り「ど

こも痛みはしませぬか、お年寄のおいとしやお足も濡ぎ鼻緒も上げて上げませふ、

少しも御遠慮なさるゝな」と腰膝撫で、いたはれば、孫右衛門起上り「何人やら

有難い、お陰で怪我も致さぬ、若い上臈のお優しい年寄と思し召し、嫁子もならぬ

介抱、寺道場へ参つても是、こゝの一心が邪見では参らぬも同然、貴女がほんの

後生願ひもふ手を洗ふて下され、幸い爰に藁も有鼻緒は私が上げましょ」と懐

の塵紙を取らせば梅川は「好い紙がござんする紙繕捻つて上げませふ」と、延引

裂きし其手元孫右衛門不思議そふに「先貴女は此處らに見知らぬお人じやが、何

人なれば此様に懇にして下さる」と、顔をつれづれ、眺むれば梅川いと胸づはら

しく、「ア、我らは旅の者私が舅の親父様、丁度お前の年延で恰好も其まゝ、外へ

する奉公とはさらゝもつて思はれず、お年寄つた舅御の臥し惱みの抱きかゝへ、

宮仕は嫁の役御用に立てば私も、何程か嬉しいもの連合は猶親御の事、飛立ッやう

にも有筈此紙と、此紙と、替へて私が申受け連合の肌につけさせ、父御に似たる

親父様の形見にさせたふござんす」と、塵紙袖に押包む涙そ色に出にける、詞の

○恩愛 親子恩愛の情。

○舊里切り 勸富強絶し。(見索引)

○盗みする子は：恨めしい、「曾我物語」に「人の親の習ひ、盗みする子は憎からで、纏く着るを恨むるは、常の親の習ひにて候ぞや」とある。

○利發 利口發明。

○御開山 開山とは、一宗一派の祖師をいふ。こゝは、真宗の祖師親鸞聖人を「御開山」というたのである。

○血の筋は悲しい 血筋の者の悲しみは、それが我に關せぬことでも、我が事のやうに悲しいとの意。

○何故前方に 前文忠兵衛の詞に「本の親孫右衛門の家なれ共、不遭さいひ」とあるに據じる。

○親は泣寄り 骨肉の親は不幸を悲しんだり、悲しみに同情したりして、寄集るゝの意である。「毛

外れに孫右衛門つくくくと推量し、さすが恩愛棄て難く老の涙にくれけるが、ム貴女の舅に此爺が、似たといふての孝行か、嬉しい中に腹が立つ年長けた悴を仔細有て舊里切り大坂へ養子に遣はせしに、根性に魔がさいて大分人の金を誤り、擧句に所を走つて此在所まで詮議の最中、誰故なれば嫁御故、近比愚痴な事なれども世の譬にいふ通り、盗みする子は憎からで纏かくる人が恨めしいとは此事よ、舊里切つた親子なれば善いに附々悪いに附、構はぬ事とは言ひながら、大坂へ養子に行て利發で器用で身を持つて、身代も仕上げた彼の様な子を勘當した、孫右衛門は痴呆者阿房者と言はれても、其嬉しさは如何あらふ今にも搜し出され、繩か、つて引かる、時好い時に勘當して、孫右衛門は出かした仕合じやと褒められても、その悲しさは如何あらふ今から思ひ過されて、一日も先に往生させて下されと拜み願ふは今參る如來様御開山、佛に虚言は吐かぬぞ」と、土にどうど平伏して聲を、はかりに、泣ければ、梅川も聲をあげ忠兵衛は障子より、手を出し伏拜み、身を揉み歎き沈みしは理とこそ聞へけれ、猶も涙を押し拭ひ「なふ血の筋は悲しい、仲の好い他人より、舊里切つた親子の親しみは世の習ひ、盗み騙りを

吹草に、「廣き野も親は泣寄りの雉子かな。

○首綱は附けさせまい。縛られの身ならせまいの意。捕籠を首輪にして胴體に掛け、兩手を背後に廻して縛上へるによつてゐる。近松作「女殺油地獄下之巻に、「一貫冬の銀に十貫冬の手形して一生首綱かかる例も有事」。

○世間廣うなり。忠兵衛が悪事をした事が世間に廣く知れ。

○其の身も狭い苦しををしをる。彼自身も世間狭う隠れ廻り、おちつくことのできぬ苦悶をしてゐる。

○知音。知己。己を知れる親友をいふ。揚雄の「解離」に「師嘴之調鐘、竝に知音者存後也」。

○銀子。判銀ともいひ、楕圓形の平たい銀貨。其の一枚は四十三匁に當る。

○難波の御坊。大阪市東區北久太郎町四丁目にある。東本願寺別院であつて、世に難波御堂、或は裏御堂、又は南の御堂といふ。本尊は安阿彌作の阿彌陀佛である。

○普請。建築工事。「ふしん」は普請の宋音。もみ佛家で普く同志が請來して、共に事を爲すより出づ。

○奉加。寄進。神佛に寄進する財物に、我が財物を加へること。

○御所街道。大和國南葛城郡御所町に連する大道。

○世間が立たぬ。世間に義理が立たぬ。

○吉左右。吉報。

○おざか。大阪を昔は「おざか」といふた。

せふよりも何故前方に内證で、斯ふくした傾城に斯ふした譯の金が入ると、密

かに便宜もするならば親は泣寄り親子なり、殊に母も無い忪、隠居の田地を賣つ

ても首綱は附けさせまい、今では世間廣うなり養子の母に難儀をかけ、人に損か

け苦勞をかけ孫右衛門が子で候とて、引込んで置かれふか一夜の宿も貸されふか、

皆彼奴が心から其身も狭い苦しををしをる、嫁御にまで涙目を見せ廣い世界を逃隠れ、

知音近附親子にも、隠れる様に身を持ちなしろく死にもせぬやうに、此親は生

み附けぬ憎い奴とは思へども、可愛ふござる」とばかりにてわつと消え入、泣き

沈む分けたる、血筋ぞ哀れなる、涙の際に巾著より銀子一枚取出し、「これは難波

の御坊の御普請の奉加銀、今こゝに有合た嫁御と存じて遣るでもなし、只今のお

禮の爲此邊にぶらついては、能ふ似たとて捕へるぞ連合は猶以て、これを路錢に

御所街道へかゝつて一足も早ふ退かつしやれ、貴女の連合にも詞こそは交さずと

も、ちよつと顔でも見たいが、いや／＼それでは世間が立たぬ、どふぞ無事な吉

左右を」と涙ながらに二足三足、行きては歸り「何と逢ふても大事あるまいかい、

「何の人が知りませふ逢ふてやつて下さんせ」、「ア、大坂の義理は缺かれまい、

○逆様な回向 子が、親の回向をするのが願なれど、親よりも子が早く死して、子の回向を親がするは、逆様の回向である。

○段々聞いて来た 段々の様子を聞いて来た。仁兵衛殿、八乃至九行本には「段々を聞てきて」とある。

○犬 探偵。上官に使はれて、竊に事情なきを嘆きつける者。

○劍の中 身が極めて危険の中にあるをいふ。

○早う脱かしてくれよ ふうか早う逃(に)が(じ)してくれよと、子をかばふ親心をよく寫した。「論語子路篇に「父爲子隱、子爲父隱、直在其中」矣。

○鰐の口 虎口といふの類で、極めて危険な處にいふ。「新羅記卷七に、「恐しく思はれし平泉寺をも、鰐の口渡れたる心地して、足早に連れらるる」。

○雨の脚 雨の降るのは線状に見えるので稱した語で、漢語にいふ雨脚・斜脚など、この意である。ここの文は、謡曲「夏刈」に、「藤波女のかづく袖笠ひ笠笠の、雨の雲脚も逸も亂るゝかたを波」と、あるに據つたものである。

○年寄 宿老をいひ、村會議員の者である。

○代官所 (見索引)

○簀の子 竹を編んで作った床又は蓆。

○からと 「からびつ」(麻繩)が、「からうづ」(からう)「からん」(織籠)した語。籠に脚あるもの。

どふぞして逆様な回向させなと懇に、頼みまする」と咽せ返り、振返り、泣く、別れ行く後に、夫婦はわつと伏轉び人目も忘れ、泣き居たる親子の中こそはかなけれ、忠三郎が女房雨に濡れて立歸り、待遠にござりませふ、こちの人は庄屋殿から直に道場へ參られ、それ故逢ひも致さずもふ雨も晴れかゝる、追附

今に戻られふ」と言ふ所へ忠三郎、息を切つて駆け來り「是は、忠兵衛様、親父様の話で段々聞て來た、此方の事で此在所は大坂から犬が入、代官殿から詮議

ある劍の中へ晝日中、運の盡きたお人じや此方の振を見附けたやら、俄に在所家竝の片端から屋搜し、親父様を今搜すこれから私が家の番、親父様はいとしや早

ふ脱かしてくれよとて、狂亂になつてじや鰐の口とは只今サア、裏道から御せ

街道山へかゝつて退かつしやれ」と、言へば夫婦は狼狽ゆる女房は譯知らず、私

も一處に退きましょか、「阿房らしい」と引退けて、夫婦に古蓑古笠や雨の脚邊も

亂る、心、死しても忘れぬ此情深く忍びて出にけり、忠三郎「先嬉し」と息を繼いだる所に、庄屋年寄先に立ち代官所の捕手の衆、忠三郎が門口背戸口二手になりどや〜と込入て、席をまくり簀の子を破りからと・米櫃・灰俵打返してぞ搜

「俵浦茶に「からミ」薩摩を俗にはからミといへり、よて米薩をからミといへり」。

○灰俵 灰を田畑に撒く爲、俵にして貯へて居るもの。

○まんまと うまく。首尾よく。

○開山 (既出)

○障り 煩惱を解脱されないので、往生の妨げとなること。この文、忠兵衛が死に處せられる事を明かにした。

○めない千鳥 「めないちどり」(日無千鳥)が音便によつて「ん」の添加した語。小兒等相集り、其の中の一人が目かくしをなし、他の者をも捕へようとして遊ぶ遊戯である。「日なしちのきの雀」さもいふ。雀も千鳥も、打群れて遊ぶものなるよりいうたものである。「浪花聞書」に「めないちどり、兒戯目かくしなり。この文は、めんないちどり」「百千鳥」「川千鳥」千鳥を重ね、千鳥鳴くを、梅川泣くにいひかけ、「梅川」の川から、「川千鳥」同音語につづけた文節である。

○水の流れと身の行方 何處に落ち行くか知れぬ意の語。「本朝廿四孝」第四の切にも、「行く水の流れ三人の装(身)作」である。この文は、「川」から「水の流れ云々」につづけ、梅川が何處に落ちつくか知れぬ、浮草の身となつた意にいふ。

しける、土間かけて二十疊にも足らぬ小家、何處に隠れん様もなし、「此家は別條なし、野道を捜せ」と言捨て、茶園島の間々を狩立て、こそ通りけれ親孫右衛門は跣足にて、「どふじやく」忠三郎善か悪か聞たい、「ア、よい」氣遣ない、夫婦ながら何事無ふまんまと落し濟した、「ハア、有難い忝い如來のお蔭直に又、道場へ参りて御開山へお禮申そふ、なふ嬉しや有難や」と二人打連れ行く所に、「龜屋忠兵衛榎屋の梅川、たつた今捕られた」と北在所に入だかり、程なく捕手の役人夫婦を搦め引き來る、孫右衛門は氣を失ひ息も絶ゆるばかりなる、風情を見れば梅川が夫も我も細目の科、眼も昏み泣き沈む忠兵衛大聲上げ、「身に罪あれば覺悟の上殺さる、は是非もなし、御回向頼み奉る親の歎きが目に懸り、未來の障りこれ一つ面を包んで下されお情なり」と泣きければ、腰の手拭引絞りめんない千鳥百千鳥、鳴くは梅川川千鳥水の流れと身の行方、戀に沈みし浮名のみ浪華に、残し留まりし

